三重県埋蔵文化財調査報告 169

中出向遺跡（第２次）

発掘調査報告
―本文編―

2000・3

三重県埋蔵文化財センター

序

伊賀は古代より交通の要となった地域であります。大和から伊勢、さらに東国へと向かうのには伊賀を通ることになります。古代における皇位継承をめぐっての争いの一つである壬申の乱に際しては、吉野に籠った大海人皇子が挙兵し、東国へ向かう際、伊賀を通過していきました。その様子は「日本書紀」のなかでもドラマチックな描写がなされています。また、奈良時代には太宰府で反乱を起こした藤原広嗣に危機を感じ、聖武天皇が伊勢へと向かった折に青山町阿保で宿泊しました。その時の仮の宮が「阿保頓宮」と呼ばれています。

中出向遺跡は、まさにこのような歴史風土のなかにあり、中出向遺跡やその周辺で生活していた人々は、そのような歴史ドラマを直に体験したことでしょう。

実際、発掘調査により中出向遺跡からは多くの住居跡がみつかり、古墳時代後期の集落遺跡としては、三重県はもちろん全国的にもその規模を誇ることができるものとなりました。残念ながら記録保存という形にはなりましたが、その成果をこうして公開することができました。

最後になりましたが、調査にあたり御協力いただきました関係諸機関および地元の皆様に厚くお礼申し上げます。そしてこの報告書が地域の歴史と文化に対する御理解の深まりの一助になることを願いますとともに、県民の皆様の文化財保護へのより一層の御理解と御協力を祈念いたします。

平成12年３月

三重県埋蔵文化財センター

所　長　　大　井　與　生

例　　言

1．本書は、三重県名賀郡青山町羽根字中出向および字間処に所在する、中出向遺跡の第２次発掘調査報告書で平成11年３月に既刊した同報告書の本文編である。
2．調査は、平成９年度県営ほ場整備事業に伴い発掘調査を実施したものである。
3．発掘調査は、次の体制で行った。
　調査主体　　三重県教育委員会
　調査担当　　三重県埋蔵文化財センター調査第一課　　技　師　竹内英昭、主　事　松本美先
　　臨時技術補助員　濵辺一機、古川　毅
4．当報告書の作成業務は、担当職員が行ったほか、遺物整理ならびに図面の浄書については三重県埋蔵文化財センターの管理指導課（平成10年度に資料普及グループに改称）職員の協力を得た。
5．当報告書の全体の編集は竹内および濵辺が行った。本文の執筆分担については、本文目次に記した。
6．調査にあたっては、青山町在住の方々、羽根土地改良区、青山町教育委員会、および県農林水産部農地整備課、上野農林事務所（当時）から多大な協力をいただいた。
7．本書で用いた地図および遺構実測図等は、国土調査法の第Ⅵ座標系を基準とし、方位の表示は座標北とする。当遺跡では磁北は約Ｎ６°30′Ｗ偏（平成２年現在）となる。
8．本書で用いた遺構図および航空写真については、朝日航洋株式会社による撮影・作成編集による。
9．本書で報告した記録類および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターにおいて管理・保管している。
10．本書で用いた遺構表示略記号は、以下の通りである。
　ＳＡ：柱列　ＳＢ：掘立柱建物　ＳＤ：溝　ＳＥ：井戸　ＳＨ：竪穴住居　ＳＫ：土坑　ＳＸ：墓

11．スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。
各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

本　文　目　次

Ⅰ.前　言 ……（竹　内）……1
Ⅱ.位置と環境 ……（松本・濵辺）……3
Ⅲ.調査の成果 ……（濵　辺）……6
Ⅳ.調査成果のまとめ ……（濵　辺）……28

挿　図　目　次

第１図 調査区地区割図（１：1,200）……2
第２図 中出向遺跡周辺の微地形（１：2,000）……3
第３図 中出向遺跡周辺の遺跡（１：50,000）……5
第４図 明治期の遺跡周辺旧地籍図（約１：10,000）……5
第５図 ＳＤ223土層断面図（１：60）……14
第６図 ＳＢ106遺構実測図（１：100）……21
第７図 Ａ・Ｂ地区竪穴住居実測図（１：100）……26
第８図 中出向遺跡周辺の古墳群（１：10,000）……29
第９図 製塩土器実測図（１：３）……30
第10図 平安末～鎌倉時代遺構と周辺地形（１：2,400）……31
第11図 古墳時代の竪穴住居変遷図（１：1,600）……32
第12図 飛鳥～奈良時代の遺構配置図（１：1,400）……33
第13図 平安末～鎌倉時代遺構変遷図(1)（１：1,400）……33
第14図 平安末～鎌倉時代遺構変遷図(2)（１：1,000）……34

表　目　次

第１表 Ａ地区古墳～飛鳥時代竪穴住居一覧 ……11
第２表 Ａ地区古墳時代土坑一覧 ……11
第３表 Ａ地区古墳～奈良時代掘立柱建物一覧 ……13
第４表 Ａ地区平安末～鎌倉時代掘立柱建物 ……15
第５表 Ａ地区平安末～鎌倉時代土坑一覧 ……15
第６表 Ａ地区平安末～鎌倉時代溝一覧 ……15
第７表 Ｂ地区古墳～飛鳥時代竪穴住居一覧 ……18
第８表 Ｂ地区古墳～飛鳥時代掘立柱建物一覧 ……18
第９表 Ｂ地区平安末～鎌倉時代掘立柱建物一覧 ……25
第10表 Ｂ地区平安末～鎌倉時代溝一覧 ……25
第11表 Ａ地区ピット出土遺物一覧 ……27
第12表 Ｂ地区ピット出土遺物一覧 ……27
第13表 遺構番号対照表 ……35

Ⅰ．前　言

1　調査に至る契機

中出向遺跡を含めた青山町羽根地区に平成８年度から県営ほ場整備の事業化が計画され、その事前の分布調査の結果、事業地内に土器等の遺物が広範囲にわたり散布し、遺跡の存在が予想された。

これを受け、事業地内の散布地のうち、72箇所に試掘調査を実施したところ、前深瀬川の両岸にそれぞれ遺跡としてまとまりをもつことが判明し、左岸域の75,000㎡を中出向遺跡、右岸域の35,000㎡を中島遺跡として遺跡の範囲とした。試掘結果や県農林側との協議で、中出向遺跡の10,910㎡と中島遺跡の10,450㎡の現状保存が困難で、やむをえず記録保存となり、平成９年度は、中出向遺跡の7,670㎡を発掘調査することとなった。

2　調査の経過

ａ．経過概要

調査区は遺跡のうち削平を免れない面的部分と排水路設置部分を大きく３つの大地区に分け、東からＡ地区～Ｃ地区とし、このうちＡ地区をⅠ～Ⅴに、Ｂ地区はⅠ～Ⅳ区にそれぞれ細分した。

調査はバックフォーを用いて表土層等を除去し、その後人力により掘削を行い、遺構検出に努めた。調査はＢ地区より開始し、Ａ地区、Ｃ地区の順で進め、Ｂ地区終了時点で空中写真測量を行い、更に全体が終了した時点で再度空中写真測量を実施した。

Ｂ地区は調査時が雨季と重なったためと調査区周辺の水田の影響を受け、排水作業に多大な労力を費やすこととなったが、遺構はかなり密であった。竪穴住居跡の検出は容易ではあったが、削平を受けており、遺存状況は良好とはいえなかった。Ａ地区は雨水の被害は少なかったが、やはり遺構は密で、竪穴住居跡等の重複も著しく、その前後関係の追究は困難をきわめた。Ｃ地区はやや位置的に離れており、遺構もかなり疎らな状況にあり、他の地区とはかなりその様相が異なっていた。

調査は平成９年５月６日より開始し、同年11月７日に終了した。この間、８月20日に羽根地区の児童を対象とした体験発掘を実施したほか、11月１日には全体の現地説明会を実施した。発掘調査は、６ヶ月の長期に渡り、途中、天候不順もあり難渋することが多かった。無事調査が終了したのは、ひとえに、作業員のみなさまの努力の賜物である。ここに、心から御礼を申しあげたい。

ｂ．調査作業日誌（抄）

1997年

５月６日　調査開始。Ｃ地区より重機掘削

５月13日　ＢⅢ区で流木等の木材が出土。

５月16日　ＢⅠ区の地区設定。

５月19日　人力掘削開始（ＢⅠ区より）。ＢⅡ区の表土除去を同時併行で行う。

５月26日　調査区北西で竪穴住居を検出。ＢⅡ区の地区設定。

５月27日　ＢⅡ区の遺構検出開始。

５月29日　竪穴住居を除き、ＢⅠ区の遺構検出および掘り下げほぼ終了。ＡⅡ区の表土除去開始。

６月２日　ＢⅠ区のＳＨ59上面で小刀出土。

６月４日　ＢⅡ区の北部で竪穴住居３棟検出。しかし削平のため残りは悪い。

６月11日　ＡⅠ区の表土除去開始。

６月17日　ＡⅠ・Ⅱ区で地区設定。

６月20日　台風７号上陸する。

６月25日　ＢⅡ区西側のＳＤ227・228掘削開始埋土から大量の瓦器、土師器皿出土。

６月26日　ＢⅠ区調査終了。

７月７日　ＢⅡ区中央付近の遺構検出着手。ピットや溝等多数検出する。

７月22日　完掘した竪穴住居の個別平面図の作成開始。石組井戸ＳＥ214を検出。

８月８日　ＳＤ231～234の掘削開始。この頃からＢⅡ区南西部分では平安末期～鎌倉初期の遺構が目立ってくる。

８月20日　地元小学生による体験発掘。ＢⅡ区の遺構掘削終了。

８月21日　Ｂ地区の航空測量。

８月22日　ＡⅠ区の遺構検出開始。

8月25日　調査区北側で竪穴住居検出。
8月27日　南北溝、ＳＤ223 を検出。
9月11日　ＡⅡ区の遺構検出開始。
9月18日　調査区内で竪穴住居を多数確認する。
　　ＳＤ223 はＡⅡ区まで延びる。
9月29日　ＡⅡ区内で竪穴住居を多数検出。ｏ21、
　　ｐ22付近で押型文土器が出土する。
10月６日　ＡⅣ区東端でＳＤ224・225 を確認。
10月13日　ＡⅡ区東半分の遺構掘り下げ終了。
　　西半分では住居数十棟が密集する。
10月20日　Ｃ地区の遺構検出開始。
10月24日　Ｃ地区の遺構掘削終了。遺構実測図の
　　作成開始。
10月27日　Ａ地区の遺構掘削はすべて終了する。
10月28日　Ｂ地区の航空測量。竪穴住居など個別
　　の実測図の作成開始。
11月１日　現地説明会開催。
11月７日　発掘調査終了。

3　調査の方法

ａ．地区設定について

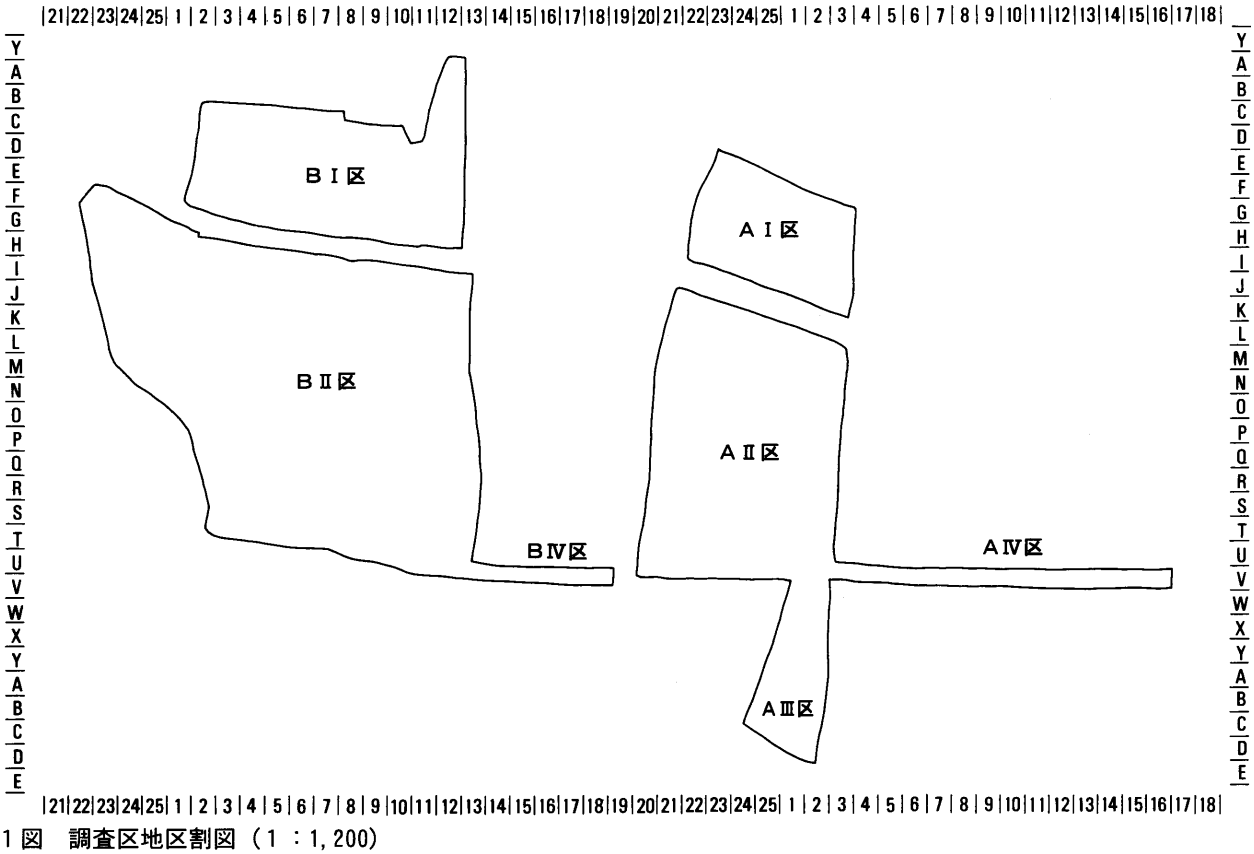
地区の設定にあたり、調査区を西側からＣ地区、Ｂ地区、Ａ地区の３つの大地区に分けた。小地区については、Ｂ地区の東壁側に任意の基準線の設定を行い、調査区を４ｍ四方の枡目で切った。地区名は、西から数字、北からアルファベットを付け、北西隅の杭を小地区の符号としている。なお、Ａ、Ｂ地区は通しの符号とし、Ｃ地区は単独の符号を与えた。

ｂ．遺構図面について

調査区の平面図は、ＡⅣ、ＡＶ区とＣ地区については１／20の手書きとし、それ以外は朝日航洋株式会社による航空測量で遺構平面図を作成している。なお、各竪穴住居は個別に１／20で、出土遺物を伴う遺構については１／10で、それぞれ手書きによる実測図を作成している。

ｃ．遺構番号について

調査にあたり、ピットは各小地区ごとに通し番号を与えている。竪穴住居や溝、土坑などの遺構については各大地区ごとに通し番号を与え、現地調査や遺物整理に活用した。しかし、本報告書の作成にあたり、遺構番号を全て反古とし、遺跡全体を通しての連番として再編成した。従って、中出向遺跡の各遺構番号は、本報告書をもって正式のものとする。なお、旧番号と報告番号との関係については、対照表を巻末に掲載している。



第１図　調査区地区割図（１：1,200）

Ⅱ．位置と歴史的環境

1　地理的環境

中出向遺跡は、名賀郡青山町羽根字中出向および間処に所在する遺跡である。現在の行政区画に従えば青山町のほぼ北西に位置することになる。遺跡の北は、青山町東方の西青山に源を発し、遠く大阪湾へと注ぐ木津川が流れ、南からは美杉村の大洞山系から発する前深瀬川が南流する。当遺跡は、ちょうど両河川の合流点付近に位置し、地形的に見れば前深瀬川の左岸に形成された自然堤防上に立地する。

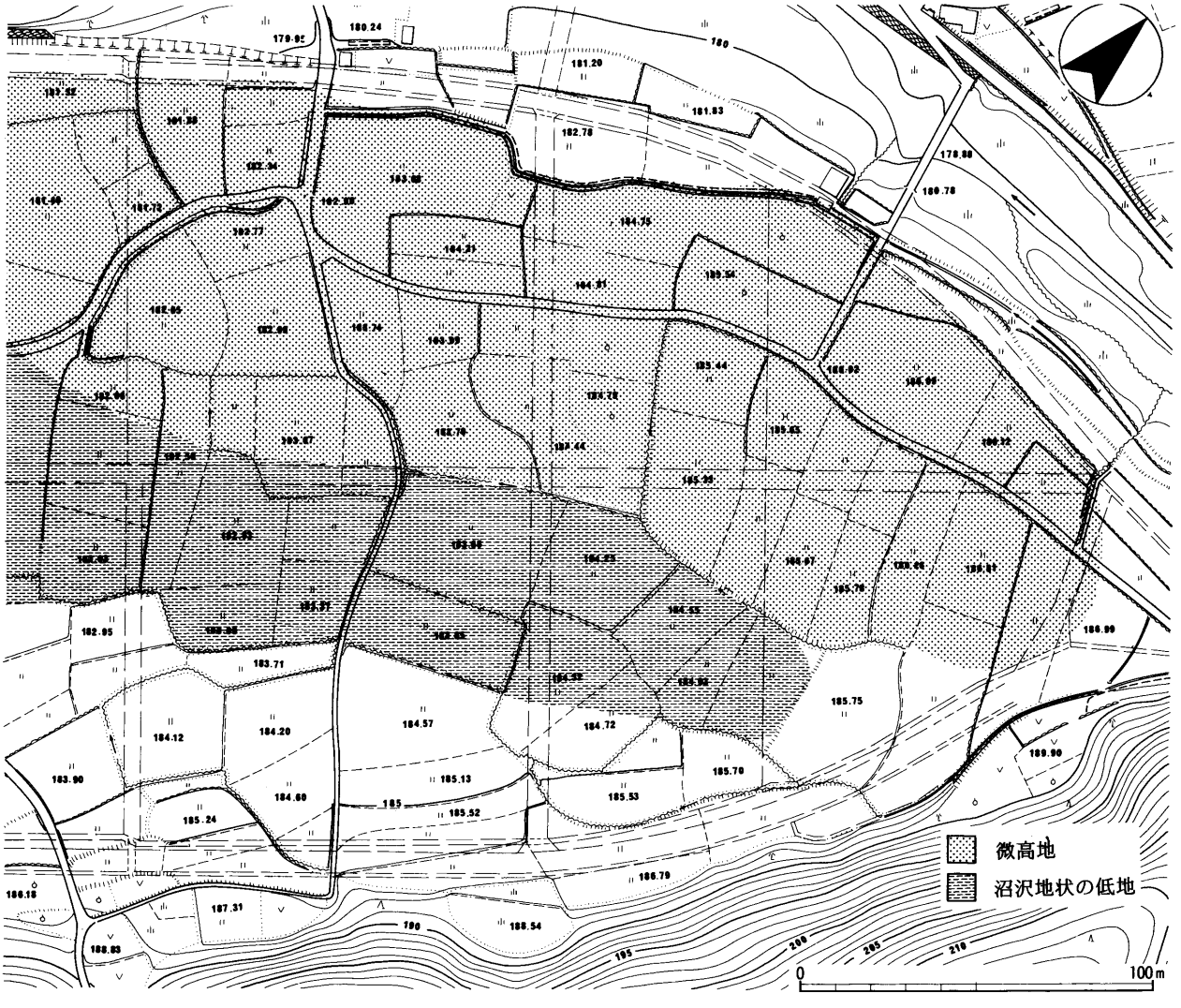
現在、木津川の支流となっている前深瀬川は、河岸に形成された自然堤防や河岸段丘、あるいは周辺の畦畔の区画から推定すると、遺跡周辺でたびたび乱流を繰り返していたと考えられる。従って、中出向遺跡の範囲自体は広大ではあるが、遺跡の中心はあくまでも今回の調査区が所在する自然堤防上であって、丘陵に向かう遺跡南側は、旧河道や後背湿地が広く展開しているものと思われる。

2　歴史的環境

ここでは、中出向遺跡（1）周辺の状況を木津川流域に沿って概観していきたい。なお、文中でふれる上・下流部は、青山町内を流れる木津川の上・下流部を示している

a．縄文時代

これまでに町内で確認された縄文時代の遺跡は、木津川やその支流の上流域に点在している。まず木津川流域では、滑石谷遺跡（2）が町内で縄文土器



第２図　中出向遺跡周辺の微地図（1：2,000）

が発見された初例として知られるほか、陥し穴4基が検出された勝地大坪遺跡（3）がある。支流の前深瀬川流域でも種生八王子遺跡があり、有舌尖頭器が採集されている。近年、前深瀬川下流域でも発掘例が増加しつつある。中出向遺跡の東方の東出遺跡（4）では大鼻式に併行する押型文土器が出土したほか、川を挟んだ対岸にあたる花代遺跡（5）でも大川式の押型文土器が検出された。遺構の確認には至らないが、下流域に居住域があった可能性は十分に考えられる。

b．弥生時代

この時期の遺跡は木津川下流域が中心で、後期に入ると遺跡数が増加していく。別府遺跡（6）・中島遺跡（7）、寺脇遺跡などは、下流域の沖積地に立地しており、後期を中心とした土器が採集されている。これよりやや木津川を上った楳（うめ）ヶ森遺跡（8）では、発掘調査が行われており、溝内から山中式を主体とする土器がまとまって出土している[1]。しかし、町内の弥生後期以前の様相は発掘例が少ないこともあり、依然不明確なままである。そのなかで、柏尾で造成中に偶然発見された銅鐸は、総高107cmを計る大きな扁平紐式袈裟袴文銅鐸で、特筆に価する。

c．古墳時代

まず古墳についてみると、青山町周辺には美旗古墳群をはじめ石山古墳など首長墓に関連する優秀な古墳が存在する。やがて、古墳時代後期に入ると阿保盆地を中心とする木津川流域では多数の後期群集墳が築かれる。中出向遺跡の後方の丘陵一帯は古墳密集地帯の一つとして知られ、下向古墳群（D）や中出向古墳群（E）、間処古墳群（F）など多数の群集墳が集中する。また伝息速別命（いけはやのみこと）古墳（阿保親王墓）（K）は、町内で最大規模の方墳として名高い。近年、町教委が隣接地で調査を行っており、5世紀末～6世紀前半の朝顔形埴輪が出土している[2]。

一方、集落遺跡については調査事例が少ないが、陸橋状遺構を確認した楳ヶ森遺跡や、13棟の竪穴住居を検出した沢代遺跡（9）[3]など、木津川下流の右岸で確認されている。後期の集落遺跡では、中出向遺跡があり、81棟の竪穴住居を検出している。中出向遺跡と前深瀬川を挟んだ対岸にある中島遺跡でも、本遺跡とほぼ同時期の住居21棟確認されており[4]、集落域が前深瀬川流域の沖積地にまで及んでいた可能性がある。

d．飛鳥・奈良時代

奈良時代、藤原広嗣の乱の際に聖武天皇が青山町を通り東国行幸を行ったといわれる。青山町の阿保には聖武天皇が宿泊した頓宮が営まれたとの伝承があり、この地は畿内と東国、伊勢を結ぶ交通の要衝として次第に重要性が増していったと思われる。

この時期として、木津川上流域には、竪穴住居や掘立柱建物を検出した川南A遺跡（10）や高寺遺跡（11）があり、集落が営まれていたと考えられる。下流部では前述の沢代遺跡が知られ、掘立柱建物を検出したほか、円面硯や墨書土器といった特殊な遺物もみつかっている[5]。今回、中出向遺跡でも多数の掘立柱建物を検出したほか、刻書須恵器が出土している。調査例の蓄積を待ちたいが、この付近に何らかの公的施設の存在も考える必要があろう。

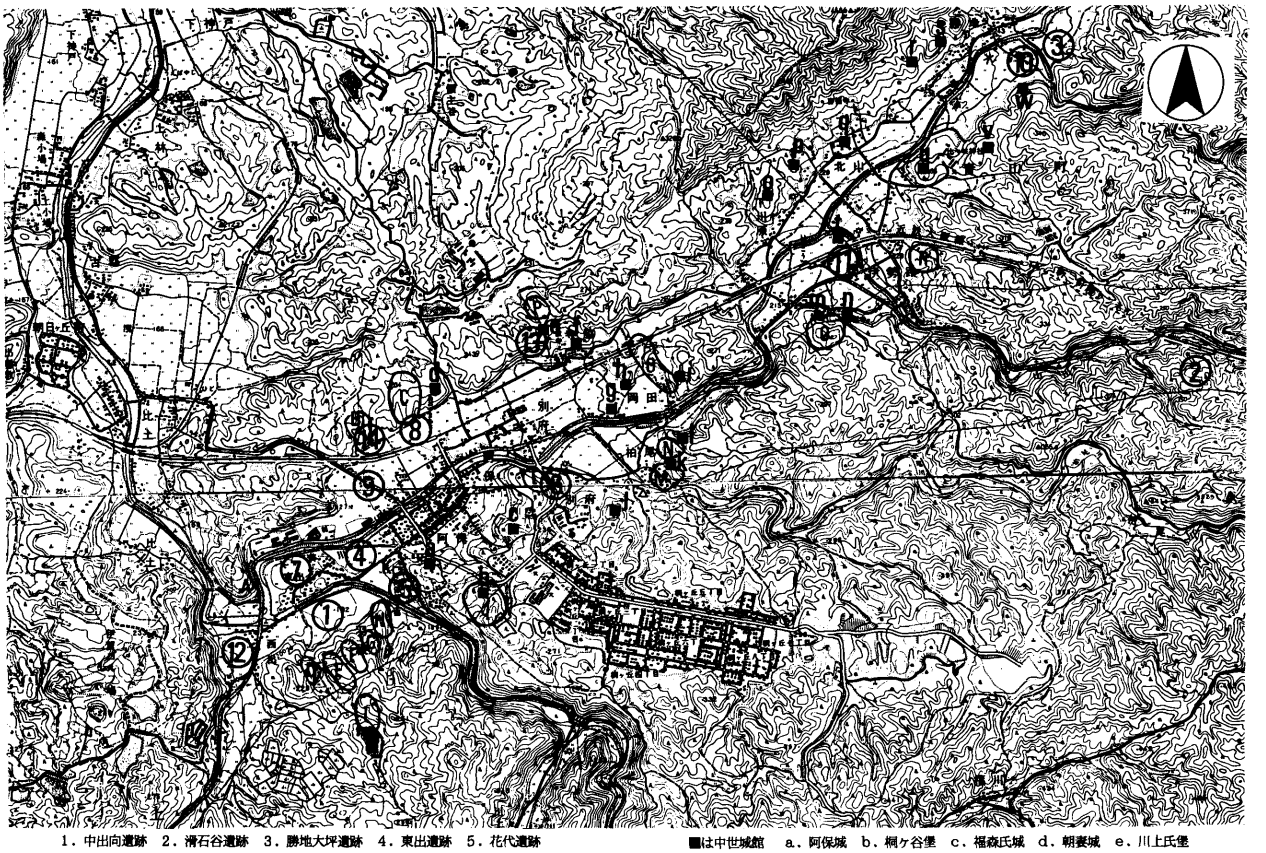
e．平安・鎌倉時代

平安時代のうち9～10世紀は、伊賀地方全体は資料も少なく、空白期となっている。そのなか、11世紀に入り藤原実遠という大私領主が現れ、荘園制度の中にこの地域も組み入れられる。東大寺文書の田畑目録によると藤原実遠の領地は、現在の青山町伊勢路から下川（青山町上津）・寺脇・別府・阿保に及ぶ地域であったとされている。

町内の遺跡は11～13世紀頃の遺跡が、下流部の羽根周辺でいくつか確認されている。当遺跡西方の西山遺跡（12）では、棟方向を揃えた掘立柱建物7棟を検出したほか、前深瀬川の右岸の花代遺跡でも大型の建物2棟を含む、5棟の掘立柱建物が認められている[6]。中出向遺跡を含む羽根周辺に当時期の集落が広範に広がっているものと思われる。

f．室町～安土桃山時代

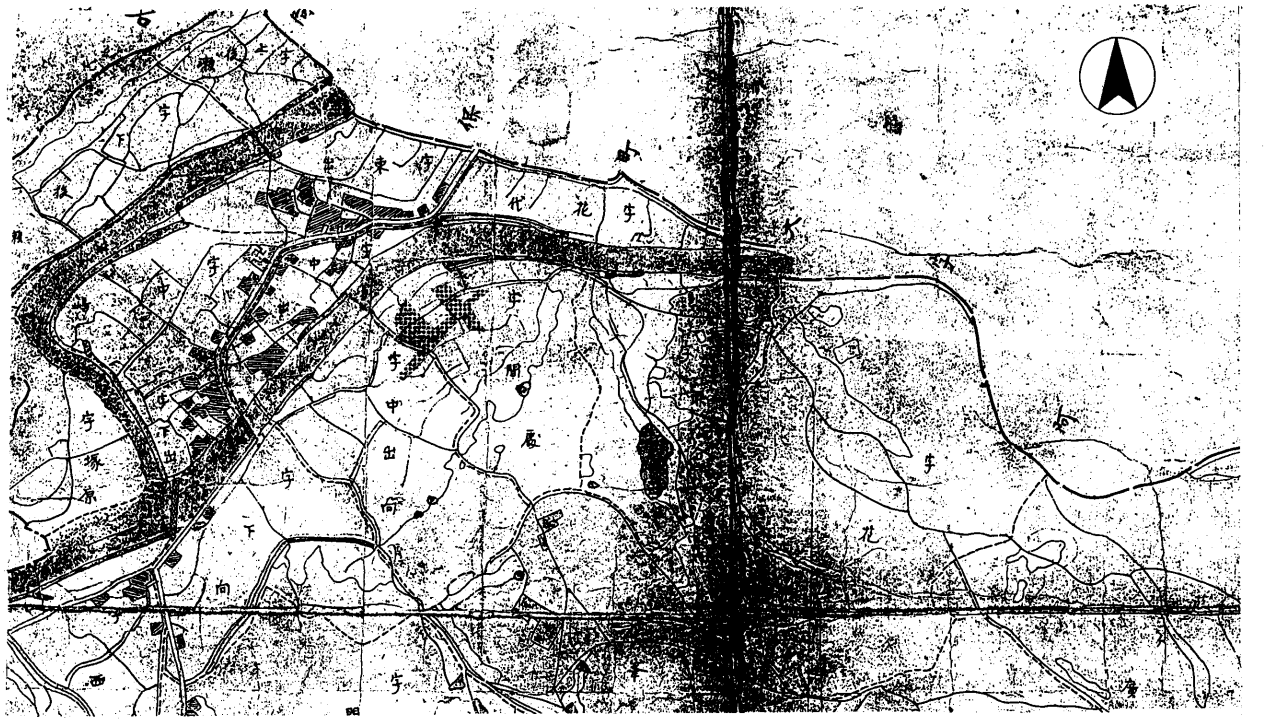
この時期、町内では木津川沿いを中心として数多く城館が築かれるようになる。『三国地誌』によると町内にはおよそ67の堡・宅址があった伝えられ、近年の調査では47箇所が遺跡として確認されている。当遺跡周辺では、前深瀬川を越えた東方の丘陵上に阿保城（a）が所在する。また、町内にはいくつか中世墓が分布し、木津川上流の勝地中世墓（3）をはじめ下流近くの安田中世墓（13）が知られる。



1．中出向遺跡　2．滑石谷遺跡　3．勝地大坪遺跡　4．東出遺跡　5．花代遺跡
6．別府遺跡　7．中島遺跡　8．様ヶ森遺跡　9．沢代遺跡　10．川南A遺跡
11．高寺遺跡　12．西山遺跡　13．安田中世墓　14．七ヶ森遺跡　△柏尾銅鐸出土地
アルファベットは古墳　A．塚原古墳群　B．七ヶ城古墳群　C．羅王山古墳群　E．中出向古墳群
F．間処古墳群　G．狐塚古墳群　H．深谷古墳群　I．峰台東古墳群
J．桐ヶ谷古墳群　K．阿保親王墓　L．宮山古墳群　M．中森古墳群
N．岡田向古墳群　O．手登古墳群　P．朝妻古墳群　Q．赤井谷古墳群
R．六地蔵古墳群

■は中世城館　a．阿保城　b．桐ヶ谷堡　c．福森氏城　d．朝妻城　e．川上氏堡
f．浅田氏館　g．竹岡兵庫館　h．宮嶋氏堡　i．竹岡左馬介館
j．岩野氏宅址　k．本田氏堡　l．小鴨氏堡　m．富増伊予堡
n．城氏宅址　o．西尾氏堡　p．本田氏堡　q．小島氏館　r．甚二郎城
s．新左近宅址　t．高嶋氏宅址　u．宮下氏砦　v．十郎城　w．城氏城

第３図　中出向遺跡周辺の遺跡（１：50,000）　（国土地理院　１：25,000『阿保』『伊勢路』より）



第４図　明治期の遺跡周辺の旧地籍図（約１：10,000）　トーン部分は発掘調査区

Ⅲ．調査の成果

1　Ａ地区の調査

Ａ地区は、他の調査区に比べやや高所に位置し、現況は水田および畑であった。地区内のうちＡＩ区は削平を受けていたものの、ＡⅡ区は比較的遺構の残りは良かった。調査区内の土層は基本的に、褐色系の砂質土の堆積を基本としており、表土から1.2mほどで地山の明黄褐色土に達する。遺構は、古墳時代の竪穴住居跡、飛鳥・奈良時代の掘立柱建物、平安・鎌倉時代の溝や掘立柱建物などを検出した。

古墳時代

6世紀代を中心に竪穴住居53棟を検出したが、大半の遺構はＡⅡ区に集中している。また土坑やピットも調査区全体で多数見つかっており、住居よりやや古い遺物も認められる。なお須恵器については田辺氏の編年[7]に沿っている。

ａ．竪穴住居

ＳＨ１～９　（第８図）

ＡＩ区の北西隅に位置する。竪穴住居９棟が重複して検出された。住居全体の切り合いは不明だが、同一の向きで重複するＳＨ１～５の切り合いが２→３→１→４→５で、向きの異なるＳＨ６～９は７・８→６・９の順となる。残存度が悪いが、住居規模は一辺が２ｍ～５ｍ前後までのものが認められる。出土遺物は、ＳＨ２から須恵器杯蓋（１）、ＳＨ４からは須恵器杯蓋（２）、土師器甕（３）のほか、住居北東にある貯蔵穴から土師器甕（209）が出土した。ＳＨ９からは須恵器杯蓋（４）がみつかった。出土須恵器は、ＴＫ47～ＴＫ10型式に併行すると思われる。

ＳＨ10（第９図）

ＡＩ区の南西隅に位置する。住居の北東部分の検出に止まった。全体規模は不明だが、残存部分より一辺３ｍ以上はあったと推定される。住居北壁中央付近で、竈に伴うと考えられる焼土の広がりを確認した他、焼土の周囲には土坑数基が認められた。しかし貯蔵穴と断定できるものはなかった。出土した須恵器杯身（８）と器台（17）は、ＴＫ23型式に併行するものであろう。また、他に土師器甕（５・７）や杯（６）がみつかっている。

ＳＨ11（第10図）

ＡＩ区の北西隅に位置する。住居北側は土坑群と重複しており、残存状態が悪いが、規模は東西6.0ｍ、南北4.8ｍの長方形と考えられる。ＴＫ23型式に併行する須恵器杯蓋（９）が出土している。

ＳＨ12（第11図）

ＡＩ区の南側に位置する。削平が激しく住居の南壁を確認したに過ぎない。出土遺物に土師器甕や、ＴＫ10型式に近似する須恵器杯蓋があるが、いずれも小片である。

ＳＨ15～18（第13図・本文第７図）

ＡⅡ区の北西に位置し、竪穴住居４棟が重複していた。切り合い関係は、ＳＨ16→18→17→15の順で確認した。

４棟のほぼ中央にあるＳＨ15は、平面形が一辺5.2ｍのほぼ正方形である。複数のピットを検出したが、主柱穴としてはまとまらなかった。住居中央と西壁の２箇所で焼土の広がりを確認した。埋土から土師器高杯（13）、須恵器高杯（12）が出土したほかＰ１から土師器高杯（221）、Ｐ２からは土師器甕（216）・高杯（217）・坩（227）がある。詳細な時期は不明だが、切り合いより６世紀中葉以降と考える。

ＳＨ18は住居の大半がＳＨ15と重複するが、残存する東西辺は2.5ｍを計る。南西隅では竈跡と考えられる焼土の広がりが認められたほか、東隣では貯蔵穴と考えられるピットを検出した。出土遺物の須恵器杯蓋（18）は、小片であるがＭＴ15～ＴＫ10型式に併行しよう。

ＳＨ16（第14図・本文第７図）

ＳＨ15の東側に位置する。住居西半分が重複するが、残存の南北辺は4.0ｍを計る。北壁と南壁で認められる壁周溝は、住居内を全周せず南東部で途切れる。出土遺物の土師器台付甕（16）は、住居南側の床面で横倒しの状況であった。須恵器杯身（14）は口縁端部内面の特徴よりＭＴ15型式に併行しよう。またＰ１から（210）、Ｐ２から（211）の土師器甕が、Ｐ３からは製塩土器（462）が出土した。

ＳＨ17（第14図）

ＳＨ15の西側に位置する。住居西半分のみ確認し残存する南北辺は5.6ｍを計る。北壁中央で竈を検出したが、竈両袖の先端が遺存するのみである。この竈中央には長さ0.4ｍの支石が立っていた。住居南東隅では貯蔵穴と思われるピットを検出した。

遺物は竈付近を中心に比較的多くみつかった。土師器甕（26）は支石の周囲に散らばった状態で、須恵器杯蓋（20）は竈の正面に置かれていた。住居南東隅では床面近くから須恵器杯身（22）が出土した。須恵器蓋杯（19・21）、高杯（23）、土師器甕（24・25）は埋土から出土した。須恵器類はＴＫ10型式に併行するものが中心である。

ＳＨ19・20・24・25（第15図・本文第７図）

ＡⅡ区の西側に位置し竪穴住居４棟が重複する。切り合い関係は、７世紀に属するＳＨ21を除き、ＳＨ24→25→20→19の順である。残存部分よりの推定だが、住居規模は一辺３ｍ～５ｍ前後のものが認められる。検出した４棟のうちＳＨ24と25で焼土の広がりを確認した。

遺物は、ＳＨ24から多く出土しており、須恵器蓋杯（37・40）、土師器甕（41～43）、ミニチュア土器（36）をはじめ、Ｐ１から土師器杯（173）、Ｐ２の土師器杯（180）、Ｐ３の須恵器杯身（138）がある。ＳＨ25からは須恵器杯身（44・45）とＰ１から土師器甕（202）が出土した。なお出土須恵器は、ＳＨ24がＴＫ47型式、ＳＨ25はＴＫ10型式に併行すると考えられる。（37）についてはＳＨ25よりの混入遺物の可能性がある。

ＳＨ26（第17図）

ＡⅡ区の南西に位置し、ＳＨ25と大きく重複している。住居規模は不明だが、残存する南北辺は6.0ｍを計る。住居内中央と北西で焼土の広がりを確認した。出土遺物に土師器甕（47）がある。時期決定は困難だがＳＨ25より古い６世紀中葉以前と考える。

ＳＨ22・23（第16図）

ＡⅡ地区の西側に位置する。竪穴住居２棟がほぼ同一の向きで重複して検出した。

ＳＨ22は住居の北半分のみで、残存する東西辺は4.0ｍを計る。住居のほぼ中央では焼土の広がりが認められた。住居床面と焼土中から土師器杯（30）、甑（29）が見つかった他、土師器坩（31）、甕（32）は埋土から出土している。また図示し得なかったが、ＭＴ15型式に近似する須恵器杯身の小片もみつかっている。

ＳＨ23は一辺5.0ｍの方形を呈すると考えられるが、南半分はＳＤ223に切られる。住居内にピットは認められるが、主柱穴としてまとまらなかった。住居の北西では焼土の広がりが認められた。焼土中から須恵器杯蓋（33）、杯身（34）が出土したほか、埋土中から土師器甕（38）、ミニチュア土器（35）がみつかった。出土した須恵器はＴＫ10型式に併行すると思われる。

ＳＨ28・29（第18図）

ＡⅡ区の南西に位置する。長方形プランの竪穴住居２棟が重複している。

ＳＨ28は、平面規模が東西2.6ｍ、南北3.5ｍの長方形である。住居内の南側で焼土の広がりが認められた。住居西壁の両端でピットを検出しているが貯蔵穴であるかどうかは不明である。出土遺物は須恵器や土師器の小片であるが、住居の切り合いを見る限り、６世紀中葉以前と考える。

ＳＨ29は、平面規模が東西3.0ｍ、南北2.2ｍの長方形である。住居中央で焼土の広がりが認められた。出土遺物に、ＴＫ10型式に併行する須恵器杯身（46）、土師器甕（48・49・54）がある。

ＳＨ31（第19図）

ＡⅡ区の南西に位置し、住居中央をＳＤ223が縦断する。平面規模は東西4.5ｍ、南北4.5ｍの正方形である。主柱穴は４個を全て確認でき、柱間は東西2.7ｍ、南北2.1ｍを計る。住居内北東で焼土の広がりが認められた。出土遺物は土師器杯（50）や、図示し得なかったが、ＴＫ43型式に近似する須恵器杯蓋の小片がある。

ＳＨ32（第20図）

ＡⅡ区の南西に位置し、住居の東半分のみ確認した。残存する南北辺は6.0ｍを計る。ＴＫ10型式と考えられる須恵器杯蓋が出土した。

ＳＨ33（第11図）

ＳＨ32の北東に位置する。大部分はＳＨ32に切られるため、住居規模は不明である。竪穴住居としたが、土坑の可能性もある。出土遺物の須恵器杯蓋

は小片で、ＴＫ10型式に近似する。

ＳＨ34（第21図）

ＡⅡ区の南西隅に位置し、ＳＨ32と重複する。残存部分は南北辺が2.9 m、東西辺３mを計る。住居北東隅で焼土の広がりを確認した。須恵器杯身（51・52）が出土したが、ＴＫ10型式に併行すると思われる。他に土師器甕（53）も出土している。

ＳＨ35（第21図）

ＡⅡ区の南西に位置する。ＳＤ223が住居中央を縦断する。北側がＳＨ31と重複するが、重複関係ではＳＨ31より古い。平面規模は東西５m、南北4.5mの長方形で、住居西側中央で焼土の広がりが認められた。出土須恵器杯身（56）は小片だが、ＴＫ43型式に併行しよう。他に土師器甕（57・61）がある。

ＳＨ36・37（第22図・本文第７図）

ＡⅡ区の北側中央に位置する。ほぼ同規模の竪穴住居を重複して検出した。

大部分が重複するＳＨ36は、平面規模は東西5.8m、南北5.8mの正方形である。主柱穴は４個全て確認でき、柱間は東西2.8m、南北2.8mを計る。内部施設は特に認められなかった。遺物は土師器甑（55）・杯（57)が出土した他、住居南東隅のＰ１から土師器坩（219)、Ｐ２から土師器杯（177）が出土している。切り合いより、時期は６世紀初頭と考える。

ＳＨ37は、ＳＨ36とほぼ同一の向きで重複し、平面規模は東西5.5～6.0m、南北5.5～6.0mのほぼ正方形である。主柱穴は４個全てを確認でき、柱間は東西2.6m、南北2.8mを計る。北壁中央には竈の痕跡と考えられる焼土の広がりがあり、この東側では貯蔵穴を検出した。遺物は、須恵器蓋杯（62～67）・高杯（69）・甕（68）などＴＫ47型式を中心とした須恵器、内面黒化処理の土師器杯（75～78）や坩（74・79）・台付甕（80・81)・土師器甕（82・83)、甑（84）がある。ミニチュア土器（70～73）も多く出土している。住居南側のＰ１から土師器甕（203）、Ｐ２からは土師器杯（174）が出土した。

ＳＨ38（第23図）

ＡⅡ区の北側に位置する。住居の北東部分がＳＨ37に切られる。平面規模は東西3.5m、南北4.2mの長方形である。主柱穴は３個確認でき、柱間は東西1.7m、南北1.9mを計る。住居内北西では焼土の広がりがみられた。ＴＫ10型式と推定される須恵器杯蓋（59）が出土しているが、ＳＨ37との切り合いを考えると、混入の可能性が高い。他に、土師器甕（60）がある。時期は６世紀初頭と考えられる。

ＳＨ39（第23図）

ＡⅡ区の中央に位置する。平面規模は東西約４～5.5m、南北3.5mのやや台形状を呈する。住居内の南西で焼土の広がりが認められた。出土した須恵器杯身（85）は小片だが、ＭＴ15～ＴＫ10型式に併行しよう。

ＳＨ40（第24図）

ＡⅡ地区の中央に位置する。住居西側がＳＤ223によって切られるが、残存する南北辺は一辺3.5mを計る。住居北壁の中央で、竈跡と考えられる焼土の広がりを確認した。出土遺物には、図示できなかったが土師器高杯・台付甕の台部分や、ＴＫ10～43型式に近似する須恵器杯蓋の小片がある。

ＳＨ41（第25図）

ＡⅡ区の中央付近に位置し、住居東側はＳＨ42・43と重複する。平面規模は東西2.6 mの方形を呈すると思われる。出土遺物は特に認められなかったが重複する２棟より６世紀中葉以前と考える。

ＳＨ42（第20図）

ＳＨ41の南側に位置する。現状は長細い土坑状ではあるが、本来は北側に大きく展開していたと考えられる。中央部分では焼土の広がりが認められた。出土した須恵器杯身（86）は、ＴＫ10型式に併行すると推定される。

ＳＨ43（第25図）

ＳＨ41の東に位置し、平面規模は東西3.7m、南北5.6mのやや不整形な長方形である。住居の北側では焼土の広がりが確認できた。出土遺物にＴＫ43型式に併行する須恵器杯身（87）がある。切り合い関係ではＳＨ42よりは新しい。

ＳＨ44（第11図）

ＡⅡ区南側に位置する。平面規模は東西3.0m、南北3.5mのほぼ長方形である。主柱穴は４個全て確認し、柱間は東西1.8m、南北1.6mを計る。住居南東隅では竈の痕跡と考えられる焼土の広がりが比較的広い範囲で確認できた。出土遺物の（88）は須

恵器杯蓋で、ＴＫ10型式に併行しよう。

ＳＨ45（第24図）

ＡⅡ区の南東に位置する。重複はなく単独で検出した。平面規模が東西3.0m、南北3.5ｍの長方形である。住居北側から東側にかけて焼土の広がりが認められた。住居南東隅では貯蔵穴を検出した。

遺物は南壁際の床面出土の土師器椀（89）や住居埋土出土の土師器甕（90）がある。また、図示しえなかったがＭＴ15型式に併行する須恵器杯蓋の細片が出土している。貯蔵穴内からは土師器杯（181）や製塩土器（463・464）が出土した。

ＳＨ46（第11図）

ＡⅡ区の南西に位置する。重複があり残存状態は悪い。出土遺物は特に認められない。

ＳＨ47（第19図）

ＡⅡ区の南側に位置し、西側はＳＨ31・46と重複する。平面規模は東西3.3 ｍ、南北4.7 ｍの不整形な長方形である。住居の北壁付近では焼土の広がりを確認した。出土した須恵器杯蓋（91）は小片だが、ＴＫ10～ＴＫ43型式に併行しよう。

ＳＨ48（第20図）

ＡⅡ区の南側に位置する。他の住居との重複はなく、単独で検出した。平面規模は一辺3.0ｍの正方形である。主柱穴は認められなかったが、住居北壁で竈の痕跡と考えられる焼土の広がりを確認した。北東隅で検出した土坑は貯蔵穴と思われ、須恵器の小片がみつかっている。出土遺物にＴＫ23～ＴＫ47型式と推定される須恵器椀（96）がある。

ＳＨ49（第18図）

ＡⅡ区の南壁中央に位置し、住居北半分のみ確認した。残存する北壁は5.8ｍ前後で、この中央では竈の痕跡と考えられる焼土の広がりを確認した。須恵器片や土師器片が出土した。小片で詳細な時期決定はできないが、切り合い関係を見る限り、６世紀後半以前と考えられる。

ＳＨ50・51（第９図）

ＡⅢ区南東隅に位置し、２棟の住居が重複する。

ＳＨ50は、住居南半分のみだが平面規模は１辺４ｍ前後であると思われる。住居北壁では竈の痕跡と思われる焼土の広がりを確認した。焼土中からＴＫ10～ＴＫ43型式に併行すると思われる須恵器杯蓋・杯身（92・93）や、土師器甕（94・95）が出土した。

ＳＨ51は、ＳＨ50の東隣に位置し、残存する東西辺は４ｍ前後である。住居内北東では焼土の広がりが認められた。出土した須恵器杯蓋（97）は、小片であるが、口縁形態を見る限りＴＫ10型式に近い。

ＳＨ52（第26図）

ＳＨ50・51の南側に位置する。平面規模は、東西4.9ｍ、南北5.2ｍのやや歪な長方形である。主柱穴は４個全てを確認し、柱間は各々2.5ｍである。これにもう一組主柱穴と考えられるピットが認められることや、住居南側が若干張り出すことから考え、住居の建替えがあった可能性がある。住居北壁では竈と考えられる焼土の広がりが検出された。出土遺物の（99）は、須恵器杯蓋の小片で断定はできないがＴＫ10～ＴＫ43型式に併行するものであろうか。他に土師器甕（106）・甑（100）が出土した他、主柱穴のうち南東の柱穴からは土師器甕（167・168）、須恵器杯蓋（166）がみつかっている。なお、切り合い関係では重複するＳＨ50・51よりは新しい。

ＳＨ53～55（第27図）

ＡⅢ区のほぼ中央で、竪穴住居３棟を重複して検出した。

ＳＨ53は、住居東半分のみで、残存する南北辺は3.5ｍを計る。土層観察では切り合う３棟中、ＳＨ53が最も新しい。住居南西で焼土の広がりを確認した。出土遺物にＴＫ10～ＴＫ43型式に併行する須恵器杯蓋・杯身（101・103）、土師器甕（106・109）がある。

ＳＨ54は、住居の西側がＳＨ53に切られるが、住居規模は東西３ｍ以上、南北2.2ｍのほぼ長方形と推定される。焼土などは特に認められなかった。出土遺物に須恵器や土師器の小片がある。

ＳＨ55は、ＳＨ53と大きく重複するが、残存する東西辺は４ｍで、ＳＨ53と規模に大差はないと考えられる。焼土の広がりを住居内北西で確認した。出土した須恵器杯蓋（102）は小片ではあるが、稜が比較的明瞭でＴＫ10型式に併行するものであろう。ほかに土師器甕（104）がある。

ＳＨ56～58（第28図）

ＡⅢ区の南側に位置する。竪穴住居３棟を重複して検出した。

ＳＨ56は、平面規模が一辺2.5ｍの正方形で、ＳＨ57に切られる。住居内にピットが認められたが、主柱穴としてまとまらなかった。図示し得なかったが、須恵器甕・杯蓋が出土している。小片だがＭＴ15～ＴＫ10型式に近似する。

ＳＨ57は、平面規模が東西2.5ｍ、南北3.5ｍの長方形である。住居の北西隅がやや張り出し、この部分に竈と考えられる焼土の広がりが認められた。また、北壁付近では、溝状の遺構を確認している。須恵器や土師器の小片が出土した。詳細な時期は不明だが、重複関係より6世紀後半以降と考える。

ＳＨ58は、平面規模が東西2.8ｍ、南北3.2ｍの長方形である。ＳＨ57と同じく、住居北西隅がやや張り出し、この部分に竈と考えられる焼土の広がりを確認した。この対面方向の南東隅には、方形のピットを検出した。ＴＫ43型式に併行する須恵器杯蓋（105）や、土師器甕（107）が出土した。

ｂ．掘立柱建物

ＳＢ94（第31図）

ＡⅡ区の南東に位置する桁行4間×梁行2間の南北棟である。建物規模は桁間が6.1ｍ、梁間が4.2ｍとなる。柱間は桁間が北から1.7ｍ、1.5ｍ、1.3ｍ、1.6ｍ、梁間は2.1ｍの等間である。柱堀形は直径0.7ｍの円形で比較的大きい。東側側柱の2番目の柱穴から須恵器杯身（112）が出土しているが、ＴＫ10型式に併行するものであろう。

ｃ．土　坑

ＡＩ区で、集中して数多くの土坑が検出された。ここでは特徴的な土坑のみ記述することとする。

ＳＫ153（第32図）

ＡＩ区の南西に位置する。土坑南半分のみ確認した。規模は残存部分より長軸1.5ｍ、深さ0.1ｍの楕円形を呈すると思われる。出土遺物に、土師器杯（188・190）や土師器甕（191）がある。

ＳＫ162（第32図）

ＡＩ区の北西に位置し、ＳＨ11と重複する。平面規模は長軸1.5m、短軸1.2mの楕円形で、深さは0.6mほどである。出土遺物に、須恵器杯蓋（147・148・230）や土師器甕（149・154・155）がある。230と154は土坑の底からやや遊離した状態であった。須恵器杯蓋はＴＫ23～47型式に併行しよう。

ＳＫ185（第25図）

ＡⅡ区の北東に位置し、西半分のみ確認した。残存部分より南北5.4m、深さ0.2mの方形土坑と推定される。内部施設が確認できず土坑としたが、竪穴住居の可能性もある。

ＳＫ176

ＡⅡ区の北西で検出した長軸1.0mほどの楕円形の土坑で、土坑中央には直径0.4mほどのピットがある。ピット上面には長さ0.2mの石が置かれ、石直下に土師器甕口縁（165）や底部（166）がある。

須恵器杯身（163）はピット底近くで出土した。

ｅ．ピット

Ａ地区では掘立柱建物として拾えなかったピット内から遺物がまとまって出土している。なかには一括性が高く、単独時期と考えられるものも含まれる。ここでは主要なもののみ取り上げることとし、それ以外については第11表を参照とされたい。

Ｅ23－Ｐ2

ＡＩ区の北西に位置する、直径1.1mほどのピットで土坑とすべきかもしれない。出土遺物に土師器杯（142・143・150）、須恵器杯蓋（141）があり、一括性が高い。

Ｈ2－Ｐ1・7

ＡＩ区の北側に位置し、ピット2基は重複する。規模は直径0.6m～1.0mほどと考えられる。遺物はＰ1から土師器甕（171）が、Ｐ7からは土師器坩（222）、甕（226）がみつかっている。

Ｉ2－Ｐ2

ＡＩ区の南東付近に位置する、直径0.5mのピットである。遺物は土師器高杯（225・229）がみつかっている。

Ｊ1－Ｐ3

ＡＩ区の南東付近にあり、ＳＨ13の東側に位置する。直径0.5mほどのピットと考えられ、口縁部がほぼ完存の土師器甕（197・204）が底からやや浮いた状態で出土している。

飛鳥・奈良時代

竪穴住居や掘立柱建物を検出した。竪穴住居は2棟検出し、時期的には7世紀前半頃に限定される。掘立柱建物は飛鳥・奈良時代としたが、柱穴の出土遺物に乏しく、詳細な時期決定ができない。なおこ

番号	規模 東西m	規模 南北m	規模 面積㎡	竈	切り合い関係	時　期	備　考
1	－	3.2	－	北？	同一の向き住居：SH2→3→1→4→5 向きの異なる住居：SH7・8→6・9	6世紀初頭～6世紀中葉	
2	－	2.4	－	－			
3	－	2.0	－	－			
4	4.5	4.5	20.3	－			
5	5.8	5.8	33.4	－			
6	3.2～	4.8	15.4～	－			
7	3.0	3.4	10.2	北？			
8	3.2～	－	－	－			
9	5.4	5.0	27.0	－			
10	2.8～	3.7～	15.1	北	単独	5世紀末	
11	6.0	4.8	28.8	－	単独	5世紀末	
12	1.7～	－	－	－	単独	6世紀中葉	
14	5.5	5.5	30.3	北？	単独	7世紀初頭	住居北西と北壁中央に焼土あり
15	5.2	5.2	27.1	西	SH16→18→17→15	6世紀中葉～	住居中央と西壁の2箇所で焼土
16	2.6～	4.0	10.4～	－		6世紀前半	北辺と西辺で壁周溝が残存
17	3.8～	5.6	21.3～	北		6世紀中葉	竈跡に支柱石残る
18	2.5	－	－	南？		6世紀前半～中葉	
19	3.0～	3.1	9.3～	－	SH24→26→25→20→19→21	6世紀中葉～	
20	－	－	－	－		～6世紀中葉	住居中央に焼土
21	3.3～	5.3～	17.5～	－		7世紀前半	
24	－	9.4～	－	北？		6世紀初頭	住居北西に焼土　2棟重複か
25	4.0～	7.0～	28.0～	－		6世紀中葉	
26	5.6	6.8	38.0	－		～6世紀中葉	住居中央に焼土　SH29より古
22	4.0	3.2～	12.8～	－	SH22→23	6世紀前半	住居中央に焼土
23	5.0～	5.0	25.0～	－		6世紀中葉	住居北西に焼土
28	2.6	3.5	9.1	－	SH28→29	～6世紀中葉	住居南側に焼土
29	3.0	2.2	6.6	－		6世紀中葉	住居中央に焼土
31	4.5	4.5	20.3	－	SH33・34→32→31となる。35は34より新しい	6世紀後半	住居北東に焼土
32	－	6.0	－	－		6世紀中葉	
33	－	3.5？	－	－		6世紀中葉	大部分がSH32と重複
34	3.2～	2.8	8.9～	東？		6世紀中葉	北西隅に焼土
35	5.0	4.5	22.5	－		6世紀後半	住居西側に焼土
36	6.0	6.0？	36.0？	－	SH38→36→37	6世紀初頭	
37	5.7	6.0	34.8	北		6世紀初頭	
38	3.5	4.2	14.7	－		～6世紀初頭	中央に焼土
39	5.5	3.5	19.3	－	単独	6世紀前半～中葉	住居南西に焼土
40	3.0～	3.5	10.5～	北	単独	6世紀中葉～後半	
41	2.7～	2.5	6.8～	－	SH41→42→44→43	～6世紀中葉	
42	4.5	－	－	－		6世紀中葉	中央に焼土
43	3.7	5.2	19.2	北？		6世紀後半	
44	4.0	4.3	17.2	西？		6世紀中葉	
45	3.0	3.5	10.5	東？	単独	6世紀前半	
46	－	－	－	－	SH46→47　2棟はSH31複する	6世紀代	
47	3.3～	4.7	15.5～	北		6世紀中葉～後半	
48	3.0	3.0	9.0	北	単独	5世紀末～6世紀初頭	
49	5.0～	－	－	北	SH35よりは古	～6世紀後半	
50	3.0～	4.5～	13.5～	北	SH50→51→52	6世紀中葉～後半	
51	4.2～	－	－	－		6世紀中葉	住居北東に焼土
52	4.9	5.2	25.9	北		6世紀中葉～後半	同一規模の住居で建替えか
53	3.7～	3.5	13.0～	南？	SH54→55→53	6世紀中葉～後半	住居南西に焼土
54	3.0～	2.4	7.2～	－		～6世紀中葉	
55	4.2	3.6～	15.1～	－		6世紀中葉	住居北西に焼土
56	2.5	2.5	6.25	－	SH56・58→57	6世紀前半～中葉	
57	2.5	3.5	8.6	西		6世紀後半～	
58	2.8	3.2	9.0	西？		6世紀後半	

第1表　A地区　古墳～飛鳥時代竪穴住居一覧

遺構名	長辺×短辺m	形態	深さm	出　土　遺　物
SK148	1.4×1.0	方形	0.1	須恵器杯蓋115
SK149	1.7×1.5	楕円	0.2	須恵器杯蓋145、土師器杯151
SK150	2.0×1.5	楕円	0.1	須恵器杯身・杯蓋、土師器甕
SK151	1.3×1.0	楕円	0.1	土師器甕
SK152	3.2×1.0～	方形	0.1	竪穴住居の可能性あり
SK153	1.3×1.0～	楕円	1.3	土師器杯188・190、甕191
SK154	1.2×1.2	円形	0.5	須恵器杯蓋146、土師器甕152・153
SK155	2.2×1.3	長楕円	0.1	土師器甕
SK157	1.9×0.8～	楕円	0.5	土師器甕117
SK158	3.7×1.3～	方形	0.2	台杯甕113
SK159	1.5×1.2～	楕円	0.3	須恵器甕、土師器甕
SK160	3.0×2.3	楕円	0.1	土師器甕207
SK161	2.2×1.3	楕円	0.5	須恵器杯身157・土師器杯160・161
SK162	1.5×1.2～	楕円	0.6	須恵器蓋杯147・148・230 土師器甕149・154・155
SK164	1.0×1.0	円形	0.3	須恵器、土師器甕
SK167	1.1×0.8	長楕円	0.3	須恵器、土師器甕

遺構名	長辺×短辺m	形態	深さm	出　土　遺　物
SK169	2.1×1.0	長楕円	0.2	須恵器、土師器甕
SK170	1.8×1.5	楕円	0.2	須恵器杯身116
SK171	0.8×0.8	円形	0.3	須恵器、土師器甕
SK172	1.8×1.0	長方	0.2	須恵器、土師器甕・杯
SK176	1.0×0.8	楕円	0.4	須恵器蓋杯159・163 土師器甕164・165・170
SK177	2.2×1.4～	方形	0.3	土師器杯118・甕117
SK179	2.3×0.7～	楕円	0.2	須恵器甑120
SK184	4.6×1.8～	方形	0.2	土師器杯123
SK185	5.4×2.5～	方形	0.2	竪穴住居の可能性あり
SK186	1.8×1.6	楕円	0.3	土師器杯・甕
SK188	2.2～×2.0	方形	0.1	須恵器、土師器甕
SK189	2.2×1.7～	方形	0.3	竪穴住居と重複する
SK191	2.6×1.5	長楕円	0.3	須恵器杯蓋
SK192	2.5×1.7～	方形	0.3	竪穴住居と重複する
SK197	2.1×2.0	方形	0.1	台付甕122
SK201	1.8～×1.5～	方形	0.1	台付甕114

第2表　A地区　古墳時代土坑一覧

こでは便宜的に7世紀代を飛鳥時代と考え、田辺編年のＴＫ209型式以降を対象としている。

ａ．竪穴住居

ＳＨ14（第12図）

ＡⅡ区の北西に位置する。他の住居と重複せず単独で検出した。平面形は東西5.5m、南北5.5mの正方形である。主柱穴は4個全て確認でき、柱間は東西3ｍ、南北3ｍを計る。住居北西と北壁中央付近の2箇所で焼土の広がりが認められた。このうち北西の焼土上に自然石2個が立てられていた。出土遺物した須恵器杯身（10・11）は、ＴＫ209～ＴＫ217型式に併行するものと考えられる。

ＳＨ21（第15図）

ＡⅡ区の北東に位置し、ＳＨ19・25と重複する。住居東部分のみ残存し、規模は東西3.3m以上、南北5.3m以上の長方形と推定される。住居の北壁の中央付近では竈の痕跡と思われる焼土の広がりを検出した。ＴＫ217型式に併行する須恵器杯身（27）が出土したほか、土師器杯（28）がみつかった。

ｂ．掘立柱建物

ＳＢ82（第29図）

ＡＩ区の北西に位置する桁行6間以上×梁行2間以上の南北棟である。西半分は調査区外に延びる。建物規模は桁行8.1m以上、梁行3.2m以上で、柱間は桁間が1.3mの等間だが、北側1間は1.6mとなる。梁間は1.3mになると思われるが、西側1間は調査区外へ続いている。柱掘形は直径0.5mの円形で、柱穴よりの出土遺物は特に認められない。

ＳＢ83（第29図）

ＡＩ区の北西に位置する桁行2間以上×梁行2間の東西棟である。西側は調査区外に続く。建物規模は桁行4.4m以上、梁行3.0mとなる。柱間は桁間が2.2mの等間だが西側1間は調査区外に続く。梁間は1.5mの等間である。柱掘形は直径0.5m前後の円形となる。柱穴よりの出土遺物は特に認めらない。

ＳＢ90（第30図）

ＡＩ区の南に位置する桁行3間×梁行2間の東西棟である。建物規模は桁行が4.3m、梁行3.4mを計る。柱間は桁間が西から1.1m、1.6m、1.6mとなり、西側がやや狭い。梁間は北から1.8m、1.6mである。柱堀形は直径0.3mの円形となる。柱穴からは土師器の小片が出土している。

ＳＢ91（第30図）

ＡⅡ区の北西に位置する桁行2間×梁行3間の東西棟である。建物規模は桁行4.9m、梁行3.8m、柱間は桁間が2.45mの等間であり、梁間は北から1.3m、1.3m、1.2mとなる。柱堀形は直径0.5～0.8mと比較的大型のものである。柱穴からは須恵器や土師器の小片がみつかっている。

ＳＢ92（第30図）

ＡⅡ区の南西に位置する桁行2間×梁行2間の東西棟である。建物規模は桁行4.9m、梁行3.3m、柱間は桁間は2.45mの等間、梁間は北から1.9m、1.4mとなる。柱掘形は直径0.4mの円形のものである。柱穴からは、土師器の小片が出土している。

ＳＢ93（第30図）

ＡⅡ区の北東に位置する。桁行2間、梁行2間の南北棟と思われるが、柱筋の並びがやや悪い。建物規模は桁行4.8m、梁行2.9mを計り、柱間は桁間2.4m、梁間1.45mとなる。柱掘形は直径0.5m前後である。柱穴から土師器甕の小片が出土した。

ＳＢ95（第31図）

ＡⅡ区の南に位置する桁行3間×梁行2間の南北棟である。ＳＨ44の東側と重複している。建物規模は桁行5.4m、梁行3.6mとなり、柱間は桁間、梁間ともに1.8mの等間である。柱堀形は直径0.3～0.7mの円形で大きさにばらつきがある。柱穴からは須恵器や土師器片が出土している。

ＳＢ96（第31図）

ＡⅡ区の南東に位置する桁行3間×梁行2間の南北棟である。東側は調査区外に延びる。建物規模は桁行5.6m、梁行3.8mとなる。柱間は桁間が北から1.8m、1.8m、2.0mで、南側がやや広い。梁間は1.9mの等間である。柱掘方は直径0.5mの円形で、柱穴から須恵器や土師器片が出土している。

ＳＢ97（第31図）

ＡⅡ区の南東に位置する桁行2間×梁行2間の東西棟である。建物規模は桁行3.7m、梁行3.4mとなる。柱間は桁間が1.85mの等間、梁間が北から1.9m、1.5mである。柱掘形は直径0.3 ～0.5mとややばらつきがある。柱穴から土師器や須恵器片が出土している。

ＳＢ98（第31図）

ＡⅣ地区の南東に位置する。建物の大部分が調査区外にあり、桁行３間、梁行１間を確認したにすぎない。東西棟と考えると、建物規模は、桁行が3.8mで、梁間は1.2m以上である。柱間は、桁間が1.3m、1.3m、1.2m、梁間は1.2mとなる。柱堀形は直径0.5mの円形である。柱穴から土師器や須恵器片が出土している。

ＳＢ99（第31図）

ＡⅣ地区の南東に位置する。建物の大部分は調査区外である。桁行２間以上、梁行１間以上の東西棟とすると、桁行5.4m以上、梁行３m以上を計る。柱間は桁間が2.4m、梁間は2.7mである。柱掘形は直径0.5mの円形となる。柱穴から須恵器や土師器片が出土している。

ｃ．溝

ＳＤ226

ＡＶ区の西側に位置する南北溝である。規模は長さ約５m、幅0.5～0.8mを計り、最深部が0.5mの浅い溝である。溝の埋土から、かえりのない須恵器杯蓋（337）や土師器甕（338）が出土した。

遺構名	間（m）×間（m）	柱間 桁間（m）	柱間 梁間（m）	棟方向	備考
ＳＢ 82	6(8.1)～×2(3.2)～	北から1.3+1.3+1.3+1.3+1.3+1.6	西から0.6～+1.3+1.3	N－29°－W	南北棟
ＳＢ 83	2(4.4)～×2(3)	西から2.2～+2.2	北から1.5+1.5	E－22°－S	東西棟
ＳＢ 90	3(4.3) ×2(3.4)	西から1.1+1.6+1.6	北から1.8+1.6	E－ 5°－N	東西棟
ＳＢ 91	2(4.9) ×3(3.8)	西から2.45+2.45	北から1.3+1.3+1.2	E－ 3°－S	東西棟
ＳＢ 92	2(4.9) ×2(3.3)	西から2.45+2.45	北から1.9+1.4	E－ 2°－S	東西棟
ＳＢ 93	2(4.8) ×2(2.9)	北から2.4+2.4	西から1.45+1.45	N－34°－W	南北棟
ＳＢ 94	4(6.0) ×2(4.2)	北から1.6+1.6+1.3+1.5	西から2.1+2.1	N－ 6°－E	南北棟、古墳時代
ＳＢ 95	3(5.4) ×2(3.6)	北から1.8+1.8+1.8	西から1.8+1.8	N－ 6°－E	南北棟
ＳＢ 96	3(5.6) ×2(3.8)	西から2.0+1.8+1.8	北から1.9+1.9	E－45°－S	東西棟 総柱
ＳＢ 97	2(3.7) ×2(3.4)	西から1.85+1.85	北から1.9+1.5	E－16°－S	南北棟
ＳＢ 98	3(3.8) ×1(1.2)～	西から1.3+1.3+1.2	北から1.2～	E－55°－S	北半分のみ
ＳＢ 99	2(5.4)～×1(2.8)～	西から0.6+2.4+2.4	北から2.8～	E－20°－S	北半分のみ

第３表　Ａ地区　古墳～飛鳥掘立柱建物一覧

平安・鎌倉時代

掘立柱建物、溝、土坑、ピットを検出している。特に掘立柱建物についてはＡＩ区の北東に集中するようで、ＡⅡ区では建物は全く認められなかった。遺物は大溝を中心に多数の瓦器椀や土師器皿が出土している。なお瓦器椀は山田氏の編年[8]に、土師器羽釜は菅原氏の編年[9]に沿っている。

ａ．掘立柱建物

ＳＢ84（第29図）

ＡＩ区の北東に位置する。東西２間×南北２間の建物南側部分の検出に止まった。建物規模は東西棟と考えると、桁行が4.4m、梁行3.5mとなる。柱間は桁間2.2mの等間で、梁間は西から１m以上、2.5mと推定される。柱掘形は0.3～0.4mの円形となる。柱穴から土師皿の小片が出土している。

ＳＢ85（第29図）

ＡＩ区の東側に位置する桁行２間×梁行２間の東西棟の総柱建物である。建物規模は桁行3.8m、梁行3.7mとなる。柱間は桁間が西から1.8m、2.0m、梁間は北から1.9m、1.7mである。柱掘形は直径0.3mの円形である。柱穴から瓦器椀の小片が出土している。

ＳＢ86（第29図）

ＡＩ区の東側に位置する桁行２間×梁行２間の東西棟の総柱建物である。桁行4.2m、梁行3.8mとなる。柱間は、桁間2.1m、梁間1.9mのそれぞれ等間である。柱掘方は直径0.3～0.5mの円形で、大きさにややばらつきがみられる。柱穴から瓦器椀や土師器皿の小片が出土している。

ＳＢ87（第29図）

ＡＩ区の東側に位置する桁行２間×梁行２間の東西棟の総柱建物である。建物規模は桁行3.4m、梁行3.3mとなる。柱間は桁間1.7m、梁間1.65mのそれぞれ等間である。柱掘形は直径0.4mの楕円形となる。柱穴から瓦器の小片が出土している。

ＳＢ88（第30図）

ＡＩ区の東側に位置する桁行２間×梁行２間の南北棟と考えた。建物規模は桁行、梁行ともに3.4mとなる。柱間はそれぞれ1.7mの等間である。柱堀形は直径0.2～0.3mの楕円形である。柱穴からは瓦器椀や土師器皿、羽釜の小片が出土している。

ＳＢ89（第30図）

ＡＩ区の東側に位置する桁行３間×梁行３間の南北棟と考えられる。建物規模は、桁行 4.7m、梁行 3.6mとなる。柱間は桁間が、北から 1.8m、1.8m、1.1mで、梁間は西から 1.4m、1.1m、1.1mと柱間が狭い。柱掘形は、直径 0.3mの円形となる。柱穴から瓦器椀や土師器皿の小片が出土した。

ｂ．溝

ＳＤ223(本文第５図)

ＡＩ・Ⅱ区のほぼ中央を縦断する南北溝である。全長は 67mにおよび、幅 2.4m、深さは、最深部で 1.2mを計る。溝の方位はやや西に振るが、ほぼ真北をとる。グリッドＭ－24 付近では人頭大の川原石の集積がみられ、これより以南で、溝は 0.5mほど深くなる。出土遺物は重複する竪穴住居からの流れ込みと考えられる須恵器や土師器（258 ～ 263・269・270）があるが、土師器皿（231～255）・羽釜（264 ～ 268・271)、瓦器椀（280～291）・瓦器皿（272～279）が中心である。

土師器皿は、口縁が外反するもの（233・234・241・246・247・250・252・253・254）が中心で、それ以外は口縁が内湾気味のものである。

瓦器椀は 284 を除き、底部内面の暗文が連結輪状文のものが多い。型式的には山田編年のⅡ段階第２型式からⅡ段階第３・４型式に併行しよう。土師器羽釜は所謂、大和型羽釜と考えられ、菅原編年のＢ１－ｃ(264）と、Ｂ１－ｄ(267・268・271)、Ｂ２－ｃ(265・266）の３種がある。

ＳＤ224

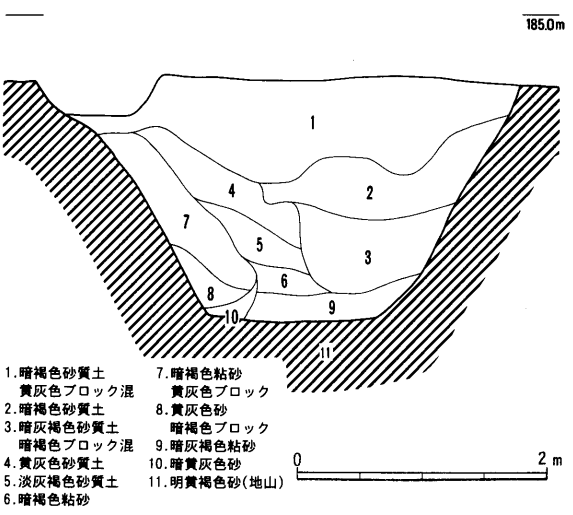
ＡⅣ区の東端に位置する。規模は幅 1.6m、深さ0.8mで、溝の方位はやや東に振るが、ほぼ真北である。出土遺物は、土師器皿（292～306）や瓦器椀（309～319)、瓦器皿（308)、土錘（307）がある。

土師器皿は、口縁が「て」の字状の形態となるもの（292・302）を除き、大半は口縁が外反する。

瓦器椀は、底部内面の暗文がジグザグ文もしくは連結輪状文となる。型式的には山田編年のＩ段階第２型式からⅡ段階第２型式に併行する。

ＳＤ225

ＳＤ224 と隣接し、ほぼ並行して南北を流れる。溝の規模は、最大幅で 2.2m、深さ 0.8mを計る。出土遺物に、土師器皿（320～323）や瓦器椀（334～



第５図　ＳＤ223 土層断面図（１：60)

336)・瓦器皿（324～327・331～333）や、土錘（328・330）がある。土師器皿は、口縁が外反するものが大半である。瓦器椀は、概ね山田編年のⅡ段階第３型式に併行すると考えられる。

ｃ．土　坑

ＳＫ180

ＡⅡ区の北東に位置する土坑である。規模は長軸 2.2m、短軸 1.7m、深さ 0.3mほどで、楕円形を呈している。土坑中央部分には長さ 0.5mほどの川原石の集積がみられたが、性格は不明である。出土遺物に瓦器皿（339）がある。土師器坩（340）は混入遺物である。

ＳＫ195

ＡⅣ区の西側に位置し、土坑の北半分を確認しただけである。規模は、残存部分より推定して、一辺 4.5mの方形土坑と考えられる。出土遺物に、土師器皿（341）がある。

ｄ.ピット

掘立柱建物としてまとまらないピットから瓦器碗や土師器皿が出土している。ピットの分布を見るとグリッドＩ25～３が中心で、掘立柱建物を多数検出したＡＩ区東側に集中する。

Ｉ１－Ｐ６

ＡＩ区南側中央に位置する、直径 0.4 mほどのピットである。遺物は、土師器皿（351～353）や白磁(364）が出土している。

遺構名	間（m）×間（m）	柱間		棟方向	備考
		桁間（m）	梁間（m）		
ＳＢ 84	2(4.4)×1(3.5)～	西から2.2+2.2	北から1.0～+2.5	Ｅ－30°－Ｎ	東半分のみ
ＳＢ 85	2(3.8)×2(3.7)	西から1.8+2.0	北から1.9+1.7	Ｎ－０°－Ｅ	東西棟　総柱
ＳＢ 86	2(4.4)×2(3.8)	西から2.2+2.2	北から1.9+1.9	Ｅ－12°－Ｓ	東西棟　総柱
ＳＢ 87	2(3.4)×2(3.3)	西から1.7+1.7	北から1.65+1.65	Ｎ－57°－Ｗ	東西棟　総柱
ＳＢ 88	2(3.4)×2(3.4)	北から1.7+1.7	西から1.7+1.7	Ｅ－10°－Ｓ	南北棟
ＳＢ 89	3(4.7)×3(3.6)	北から1.8+1.8+1.1	西から1.4+1.1+1.1	Ｎ－30°－Ｗ	南北棟

第４表　Ａ地区　平安末～鎌倉時代掘立柱建物一覧

遺構名	長辺×短辺m	形態	深さm	出土遺物
ＳＫ163	1.5×1.2	楕円	0.6	常滑焼甕、瓦器椀
ＳＫ165	1.1×1.0	楕円	0.6	瓦器椀、土師器皿、山茶碗
ＳＫ166	1.2×0.6～	楕円	0.7	瓦器椀、土師器皿
ＳＫ180	2.2×1.7	楕円	0.3	瓦器皿339
ＳＫ195	4.5×0.8	方形	0.4	土師器皿341

第５表　Ａ地区　平安末～鎌倉時代土坑一覧

遺構名	溝方向	幅m	全長m	深さm	備考
ＳＤ223	Ｎ－10°－Ｗ	2.4	70～	1.2	調査区を縦断
ＳＤ224	Ｎ－８°－Ｅ	1.6	－	0.8	ＳＤ225に並行
ＳＤ225	Ｎ－８°－Ｅ	2.2	－	0.8	

第６表　Ａ地区　平安末～鎌倉時代溝一覧

２　Ｂ地区の調査

Ｂ地区は、Ａ地区よりやや地形的に下がった場所に位置する。現況は水田および畑で地区内のＢⅠ・Ⅱ区は安定した土壌である。ＢⅢ区は表土直下で湿地性の堆積土の青灰色粘土層に達した。流木が多く出土したが、遺構は全く検出されなかった。

調査区内の土層は基本的に、表土から0.6～0.8mほどで遺構面に達する。しかし場所によっては表土直下ですぐ地山となるなど水田に伴う削平がかなり進んでいた。遺構は、古墳時代の竪穴住居、飛鳥・奈良時代の掘立柱建物、平安末～鎌倉時代の溝や井戸、掘立柱建物などを検出している。

古墳時代

６世紀代の竪穴住居17棟や掘立柱建物３棟を検出している。特に竪穴住居はＡ地区に比べ、ほぼ一定間隔をおいて分布するなど、住居の数棟単位にまとまりがみられる。

ａ．竪穴住居

ＳＨ59（第33図、本文第７図）

ＢⅠ区の西北に位置する。平面規模は、東西6.0m、南北6.5mの長方形である。４主柱穴からなり柱間は東西3.7m、南北3.8mを計る。住居の東壁中央で竈跡と思われる焼土の広がりが認められた。また、東壁にある方形のピットはＳＢ105の柱穴と重複するが、貯蔵穴の可能性が高い。

遺物は東壁の貯蔵穴から須恵器杯身（468）、土師器甕（472）が、Ｐ１からは須恵器杯身（568）が出土した。須恵器杯蓋（466・467）、高杯（469）、土師器甕（470・471）は埋土からの出土である。須恵器は概ねＴＫ10型式に併行しよう。

ＳＨ61（第47図）

ＢⅡ区北西に位置する。平面規模は東西3.6m、南北４m以上のやや歪な長方形で、南側は削平を受ける。残存状態は悪いが主柱穴は４個確認しており柱間は東西2.3m、南北2.2mとなる。須恵器杯蓋（473）は小片だが、ＴＫ10～43型式に併行しよう。

ＳＨ62（第35図）

ＢⅡ区北西に位置し、２棟が重複する。ＳＨ62は平面規模が東西6.0m、南北6.5mの長方形で、住居西壁に溝状の掘りこみが巡る。主柱穴は４個全て検出し、柱間は東西3.8m、南北3.7mである。住居南壁には自然石があり、その直下に焼土の広がりが認められた。焼土西側にある方形のピットは貯蔵穴と考えられる。

出土遺物は、溝状の掘り込みから須恵器杯身（480）、主柱穴から土師器椀（476）・土師器甕（487）、焼土中より須恵器杯身（479）が出土した。須恵器杯身（474）は、貯蔵穴と考えられるピットからみつかった。土師器椀（475）、須恵器杯蓋（478）・高杯（477）は埋土中から出土した。須恵器は一部、ＭＴ15型式を含むが、概ねＴＫ10型式になろう。

ＳＨ63（第36図　本文第７図）

ＳＨ63は東西5.8m、南北6.2mの長方形で、壁周溝が住居の四辺を巡る。主柱穴は、４個全て確認し、柱間は東西3.3m、南北3.7mである。住居南東で、貯蔵穴と考えられる方形ピットを検出した。

遺物は貯蔵穴からまとまって出土し、土師器坩（481・482）・甕（486・488）・甑（489）は、いずれも貯蔵穴内に落ち込んだ状況であり、須恵器杯蓋（483）は底から遊離していた。また、貯蔵穴以外のＰ１からは土師器甕（587）が出土した。須恵器杯蓋（484・485）は埋土出土である。須恵器は、概ねＴＫ10～43型式に併行するものと考えられる。

ＳＨ64（第37図）

ＢⅡ区の北側中央に位置する。平面規模は、東西5.5m、南北6.2mの長方形である。主柱穴は3個を確認し、柱間は東西2.8m、南北3.3mを計る。南東隅で壁周溝が部分的に認められる。住居北壁と南壁の2箇所に焼土が認められたが、南壁の焼土を竈の痕跡と考えると、南東隅のピットは貯蔵穴の可能性がある。出土した須恵器杯身（491）は、小片だがＴＫ10型式前後に併行しようか。

ＳＨ65（第38図　本文第7図）

ＢⅡ区のほぼ北側中央に位置する。南側はＳＤ229に切られるが、平面規模は東西6.3m、南北5.2mの長方形となる。主柱穴は4個全て確認し、柱間は東西4.2m、南北4.0mを計る。また住居南西には方形のピットが認められた。遺物は、住居南西の方形ピットから土師器甕（492）が出土したほか、住居中央のＰ1から土師器杯（555～557）が出土した。
詳細な時期は不明だが、切り合い関係から6世紀中葉以前と考えられる。

ＳＨ66（第39図）

ＢⅡ区の北側中央に位置する。ＳＨ64との重複のため住居北部分の確認に止まる。残存する東西辺は4.5mほどである。住居中央では焼土の広がりが認められた。出土遺物は特にないが、切り合い関係から6世紀中葉以前と考える。

ＳＨ67（第40図）

ＢⅡ区北東に位置する。ＳＨ67～69の3棟が重複する。平面規模は東西5.4m、南北4.8mの方形で住居規模は3棟中最も小さい。主柱穴は4個全て確認し、柱間は東西2.7m、南北2.4mを計る。住居北壁中央には竈跡と考えられる焼土の広がりがあったが、貯蔵穴は不明である。出土した須恵器杯蓋（490）は、小片だがＴＫ43型式に併行しようか。

ＳＨ68（第41図）

重複する3棟の中央で検出した。規模は南北6.1m、東西4.0mの長方形である。主柱穴は4個全て確認でき、柱間は東西2.2m、南北3.2mを計る。北壁中央に竈跡と考えられる焼土の広がりがある。切り合い関係から6世紀中葉以前と推定する。

ＳＨ69（第42図）

平面規模が東西5.4m、南北5.2mのほぼ正方形である。主柱穴は3個を確認し、柱間は東西3.5m、南北3.2mを計る。住居北壁中央に広がる焼土は、広がりが弱く、竈に伴うかは断定できない。小片だがＴＫ10型式と思われる須恵器杯蓋が出土した。

ＳＨ70（第43図）

ＢⅡ区東側に位置し、ＳＨ70～72が重複する。ＳＨ70は、平面規模が東西5.3m、南北5.5mのほぼ正方形で、重複する3棟中、最も新しい。主柱穴は4個全て確認し、柱間は東西3.0m、南北3.5mを計る。出土遺物は特にないが、時期は6世紀後半以降と考えられる。

ＳＨ71（第44図）

重複する3棟の中央で検出した。北西部分は削平を受けるが、残存部分から平面規模は東西4.8m以上、南北3.5mの長方形と推定される。住居東壁中央には竈跡と思われる焼土の広がりが認められた。須恵器杯蓋（493）が焼土中から出土したが、ＴＫ43型式に併行しよう。土師器甕（494）は埋土から出土した。

ＳＨ72（第44図　本文第7図）

住居同士の重複が激しく、東半分を確認したのみであるが、残存部分より南北4.3mと推定される。
住居北側中央で焼土の広がりが認められた。住居南東隅と東壁でピット2基を検出した。

出土遺物は南東隅のＰ1からは、土師器甕（500・504）が底から遊離した状態でみつかった。土師器杯（497）は東壁のＰ2からである。須恵器杯蓋（495・496）、土師器台付甕（498・499）、土師器甕（502・503・505）は埋土からである。出土須恵器はいずれもＴＫ47型式に併行するものであろう。

ＳＨ73（第45図）

ＢⅡ区の南東に位置する。住居南西は削平を受けるが、平面規模は東西5.0m、南北5.1mの歪な方形になる。主柱穴は4個全て確認でき、柱間は東西3.2m、南北2.5mを計る。住居北壁中央では竈跡と考えられる焼土の広がりが認められた。出土した須恵器杯身（506）は、ＴＫ47型式に併行しよう。

ＳＨ74（第46図）

ＢⅡ区の南東に位置する。平面規模は南北2.2～3.0m、東西3.5～4.0mの方形で、東部分が若干張り出す。土層観察ではＳＨ74埋土の黄褐色土に暗褐色土が切れこむ状況で、住居の重複を考えたが、2棟

の切り合いは確認できなかった。住居北西で焼土の広がりが見られ、張り出し部分では貯蔵穴と思われるピットを検出した。

遺物は貯蔵穴内の須恵器杯蓋（509）、土師器甕（510）が底から遊離した状態であった。須恵器杯蓋（508）は住居床面から出土した。須恵器杯蓋（507）や土師器甕（511）は埋土からである。出土須恵器は、ＭＴ15型式に併行する（508）、（509）と、ＴＫ43型式に併行する（507）がある。

ＳＨ76（第46図）

ＢⅡ区の南東に位置する。平面規模は東西4.0mで南北3.7mの方形である。住居北東では焼土の広がりがわずかに認められた。出土した須恵器杯蓋（513）は小片だが、ＴＫ43型式に併行しようか。他に土師器甕（512）がある。

ＳＨ81（第48図）

ＢⅢ区東端に位置する。他遺構との重複や、後世の削平もあり平面規模は、東西辺が3mの不整形な方形である。出土遺物に須恵器杯蓋（523）、杯身（524）・高杯（522）や土師器甕（525・526）がある。出土した須恵器はＴＫ10型式に併行しよう。

ｂ．掘立柱建物

ＳＢ111（第49図）

ＢＩ区の北東で検出した。調査区の西側へ続く桁行2間以上、梁行2間以上の南北棟と推定した。建物規模は桁行5.3m、梁行3.0mである。柱間は桁間、梁間とも1間分しか確認できなかったが、桁間が3.7m、梁間は2.5mとなる。柱掘形は直径0.5～0.7mと比較的大きい。柱穴から須恵器杯蓋（527・528）や土師器杯（529・530）が出土した。

ＳＢ128（第52図）

ＢⅡ区の北側で検出した。桁行2間、梁行2間の東西棟の総柱建物と思われるが、桁行中央の柱穴を欠く。建物規模は桁行3.8m、梁行3.4mで柱間は桁間が西から2.0m、1.8m、梁間は、北から1.5m、1.9mとなる。柱掘形は直径0.3mの円形である。柱穴からＴＫ10型式に並行する須恵器の杯身（537）が出土している。

ＳＢ143（第49図）

ＢⅡ区の南側で検出した桁行2間、梁行2間の東西棟の総柱建物である。建物南側は集石土坑ＳＫ218に切られている。規模は桁行が4.5m、梁行は4mを計る。柱間は桁間が西から2.3m、2.2m、梁間は2.0mの等間となる。柱掘形は直径0.4mの円形である。出土遺物は南側柱の中央の柱穴からで、完形の須恵器杯蓋8点と杯身1点（531～536・542～544）が出土したほか、須恵器壺の口縁（545）や土師器坩（546）が一括して出土した。須恵器杯蓋、杯身はＴＫ43型式に併行しよう。なお531の杯蓋は、口縁に刻み目状の調整を施すものである。

ｄ．ピット

Ａ地区同様、掘立柱建物としてまとまらないピットから遺物が出土している。

Ｆ８－Ｐ２

ＢＩ区のほぼ中央に位置する長辺0.7m、短辺0.4mの方形状を呈し、ピットというより土坑に近い。出土遺物は、須恵器杯身（549・550）や土師器甕（551～554）が一括して出土している。

飛鳥・奈良時代

検出された竪穴住居はＡ地区と同じく、7世紀初頭頃までで8世紀以降のものは認められない。掘立柱建物は30棟を検出した。

ａ．竪穴住居

ＳＨ77・78（第47図）

ＢⅡ区の南東端に位置し、竪穴住居2棟が重複して検出された。切り合い関係は不明だが、ＳＨ77は出土遺物より古墳時代に属する可能性がある。住居平面規模は、ＳＨ77が一辺3mほどの方形になると推定される。ＳＨ77の北壁中央では竈跡と考えられる焼土の広がりが認められた。

出土遺物は、ＳＨ77の焼土中から須恵器杯蓋（516・517）がみつかった。小片だがＴＫ43～217型式に併行しよう。516は口縁部に刻み目をもつ杯蓋である。他に土師器甕（519）が出土した。ＳＨ78の出土遺物は、須恵器杯蓋（514・515）であるが、ＴＫ43～ＴＫ209型式に併行しよう。

ＳＨ79（第48図）

ＢⅢ区の西端に位置する。住居南半分は調査区外に延びる。平面規模は残存部分より、一辺5mほどの方形と推定される。住居の中央では、焼土の広がりが認められた。出土遺物は、埋土出土のＴＫ209型式と推定される須恵器蓋杯（520・521）がある。

番号	規模			竈	切り合い関係	時期	備考
	東西m	南北m	面積㎡				
59	6.0	6.5	39.0	東	単独	6世紀中葉	
61	3.6	4.0	14.4	−	単独	6世紀中葉〜後半	北壁は焼土土坑に切られる
62	6.0	6.5	39.0	−	SH62→63	6世紀中葉	南壁中央に焼土
63	5.8	6.2	36.0	−		6世紀中葉〜後半	壁周溝全周、南東隅に貯蔵穴か
64	5.5	6.2	34.0	−	SH65・66→64	6世紀中葉	南東に壁周溝残る
65	6.3	5.2	32.8	−		〜6世紀中葉	南西に方形土坑　SH64より古い
66	4.5	−	−	−		〜6世紀中葉	住居中央に焼土　SH64より古い
67	5.4	4.8	25.9	−	SH68→69→67	6世紀後半	
68	4.0	6.1	24.4	−		〜6世紀中葉	重複する3棟でもっとも古い
69	5.4	5.2	28.1	北?		6世紀中葉	
70	5.3	5.5	29.2	−	SH72→71→70	6世紀後半〜	重複する3棟でもっとも新しい
71	4.8〜	3.5	16.8〜	北		6世紀後半	
72	−	4.3	−	−		6世紀初頭	住居中央に焼土
73	5.0	5.1	25.5	北	単独	6世紀初頭	
74	3.1	4.2	13.0	−	単独	6世紀前半・6世紀後半	2棟重複か、北西に焼土
76	3.7	3.7	13.7	−	単独	6世紀後半	北東に焼土
77	3.0	−	−	北	SH78→77	7世紀前半	
78	−	−	−	−		6世紀後半〜7世紀初頭	重複激しい。6世紀代に遡る可能性あり
79	5.2〜	3.2〜	16.4〜	−	単独	7世紀前半	住居中央に焼土
81	3.0	−	−	−	単独	6世紀中葉	

第7表　B地区　古墳時代〜飛鳥時代竪穴住居一覧

遺構名	間(m)×間(m)	柱間		棟方向	備考
		桁間(m)	梁間(m)		
SB100	3(5.4)〜×1(1.8)〜	北から1.2〜+2.1+2.1	西から1.8	N−17°−W	東半分のみ
SB101	2(3.3)×2(3.1)	西から1.5+1.8	北から1.55+1.55	N−30°−E	東西棟
SB102	2(3.0)×2(3.0)	北から1.5+1.5	西から1.5+1.5	N−25°−E	南北棟
SB103	4(6.7)×2(2.8)〜	北から1.8+1.6+1.6+1.7	西から1.4+1.4〜	N−10°−W	東半分のみ
SB104	3(5.4)〜×1(1.8)〜	北から1.8+1.8+1.8〜	西から1.8〜	N−31°−W	南側の一部のみ
SB105	2(6.2)×2(3.6)	西から3.1+3.1	北から1.8+1.8	E−47°−N	東西棟　柱間広い
SB106	2(3.6)×2(3.6)	北から1.8+1.8	西から1.8+1.8	N−7°−E	南北棟　総柱
SB107	3(5.7)×1(2.3)〜	西から2.1+1.5+2.1	北から2.3〜	E−8°−N	北半分のみ
SB108	4(6.0)×2(3.8)〜	西から1.4+1.8+1.8+1.4	北から1.9+1.9〜	E−15°−S	北半分のみ
SB109	2(5.4)×2(4.8)	北から2.7+2.7	西から2.4+2.4	N−31°−E	南北棟　総柱
SB111	2(5.3)×2(3.0)	北から1.6〜+3.7	西から0.5+2.5	N−19°−W	古墳時代
SB113	3(3.4)×1(2.0)	北から1.4+1.6+1.4　南面庇　1.6	西から1.6+1.4	N−2°−E	南北棟
SB115	3(4.6)〜×2(3.9)〜	西から1.2+1.7+1.7	北から2.2〜+1.7	E−30°−N	東西棟の総柱か
SB116	2(4.2)×2(4.2)	北から2.3+1.9	西から1.9+2.3	N−30°−E	南北棟
SB118	4(6.3)×2(3.2)	西から1.7+1.3+1.7+1.6	北から1.6+1.6	E−2°−S	東西棟
SB119	2(5.2)×2(4.8)	西から2.7+2.5	北から2.5+2.3	E−5°−S	東西棟　総柱
SB120	2(2.8)×2(2.8)	北から1.4+1.4	西から1.4+1.4	N−7°−E	南北棟　総柱
SB121	2(4.0)×2(3.6)	西から2.2+1.8	北から1.8+1.8	E−4°−N	東西棟
SB124	4(5.8)×3(4.2)	北から1.45+1.45+1.45+1.45	西から1.4+1.4+1.4	N−42°−W	南北棟
SB127	2(3.1)×2(2.9)	西から1.6+1.5	北から1.3+1.6	E−20°−N	東西棟　総柱
SB128	2(3.8)×2(3.4)	西から2.0+1.8	北から1.5+1.9	E−10°−N	東西棟　古墳時代
SB129	2(3.5)×2(3.5)	北から1.75+1.75	西から1.75+1.75	N−52°−E	南北棟　総柱
SB130	2(3.2)×2(3.2)	北から1.6+1.6	西から1.6+1.6	N−17°−W	南北棟
SB132	2(4.2)×2(3.8)	北から2.1+2.1	西から2.0+1.8	N−24°−E	南北棟　総柱
SB133	2(3.4)×2(3.2)	北から1.8+1.6	西から1.6+1.6	N−22°−E	南北棟　総柱
SB135	2(6.8)〜×2(5.2)	北から3.4+3.4	西から3.2+2.0〜	E−30°−S	西側は調査区外
SB137	2(5.2)×2(5.0)	北から2.7+2.5	西から2.4+2.6	N−20°−E	東西棟　総柱
SB141	3(5.1)×2(3.0)	北から1.9+1.6+1.6	西から1.5+1.5	N−22°−W	南北棟
SB142	2(4.2)×2(3.0)	西から2.1+2.1	北から1.5+1.5	E−4°−S	東西棟　SB146と重複
SB143	2(4.5)×2(4.0)	西から2.3+2.2	北から2.0+2.0	E−7°−S	東西棟　古墳時代
SB144	2(3.3)×2(2.8)	北から1.8+1.5	西から1.3+1.4	N−13°−W	南北棟　総柱
SB145	3(4.7)×2(3.8)	北から1.7+1.5+1.5	西から1.9+1.9	N−20°−W	南北棟　総柱
SB147	3(5.6)×2(3.0)	西から1.8+2.0+1.8	北から1.5+1.5	E−4°−N	東西棟

第8表　B地区　古墳〜飛鳥時代掘立柱建物一覧

b．掘立柱建物

SB100（第49図）

BI区の北西隅に位置する桁行2間以上、梁行1間以上の南北棟の建物で、後述するSB103と棟方向が等しい。建物規模は桁行5.4m以上、桁行1.8m以上となる。柱間は、桁間2.1m、梁間は1.8mであると思われる。柱掘形は、直径0.5mの円形のものである。柱穴からは、土師器や須恵器の小片が出土している。

SB101（第50図）

BI区の北西に位置する桁行2間、梁行2間の東西棟の建物である。この南側にあるSB102とは棟方向がほぼ同じである。建物規模は桁行3.3m、梁行3.1mで、柱間は桁間が北から1.5m、1.8mで梁間は1.55mの等間となる。柱掘形は直径0.2mの円形である。柱穴から土師器小片が出土している。

SB102（第49図）

BI区北西端に位置する桁行2間、梁行2間の南北棟の建物である。建物規模は桁行、梁行とも3.0mで、柱間も1.5mの等間となる。柱掘形は直径0.4mの円形である。柱穴から土師器小片が出土した。

SB103（第50図）

ＢＩ区の西壁付近に位置する桁行４間、梁行１間以上の南北棟の建物である。建物規模は桁行 6.7m以上、梁行 2.8m以上となり、柱間は桁間が北から1.8m、1.6m、1.6m、1.7m、梁間は 1.4mである。柱掘形は直径 0.4～0.5mとなる。柱穴から須恵器や土師器の小片が出土している。

ＳＢ104（第 50 図）

ＢＩ区の西壁に位置する。大部分は調査区外に延びる。桁行３間以上、梁行１間以上の南北棟と考えると、建物規模は桁行 5.4m以上、梁行 1.8m以上で、柱間は桁間と梁間ともに 1.8mの等間となる。柱掘形は直径 0.4mの円形である。柱穴から土師器の小片が出土している。

ＳＢ105（第 49 図）

ＢＩ区の西に位置する桁行２間、梁行２間の東西棟の建物である。建物規模は桁行 6.2m、梁行 3.6mとなる。柱間は桁間が 3.1m、梁間は 1.9mと桁間が極端に広く、建物としたが若干疑問が残る。柱掘形は直径 0.5～0.6mの円形である。柱穴から土師器の小片がみつかっている。

ＳＢ106（本文第６図）

ＢＩ区の南西部に位置する桁行２間、梁行２間の南北棟の総柱建物である。建物規模は、桁行と梁行が 3.6mで、柱間はともに 1.8mの等間である。柱堀形は直径が 0.2～0.5mの楕円形となり、大きさにややばらつきがある。柱穴からは土師器の小片が出土している。

ＳＢ107（第 49 図）

ＢＩ区の南西に位置する。西半分は調査区外で、東西３間、南北１間分を検出したにすぎない。東西棟とすると、建物規模は桁行 5.7m、梁行 2.3m以上で、柱間は桁間が西から 2.1m、1.5m、2.1mで、梁間は 2.3mと推定される。柱堀形は直径 0.5m前後の円形である。柱穴から土師器の小片が出土している。

ＳＢ108（第 50 図）

ＢＩ区の南に位置する。建物南半分は調査区外に延び、検出できたのは東西４間、南北２間分のみである。建物規模は、東西棟と考えると桁行 6.0m、梁行 3.8mとなる。柱間は桁間が、西から 1.4m、1.8m、1.8m、1.4mで、梁間が、1.9mの等間である。柱掘形は直径 0.3～0.4mのほぼ円形となる。柱穴からは須恵器や土師器の小片が出土している。

ＳＢ109（第 50 図）

ＢＩ区の南に位置する桁行２間、梁行２間の南北棟の総柱建物である。建物規模は桁行 5.4m、梁行4.8mとなる。柱間は、桁間が 2.7m、梁間も 2.4mの等間である。柱掘形は、直径 0.6mの円形となる。柱穴からは土師器の小片が出土している。

ＳＢ113（第 50 図）

ＢⅡ区の北西に位置する桁行３間、梁行２間の東西棟の建物で身舎に南面庇がつくと思われる。建物規模は桁行 4.4m、梁行 4.6mである。身舎の柱間は桁間が西から 1.4m、1.6m、1.4m、梁間は北から 1.6m、1.4m、庇間は 1.6mとなる。身舎と庇の柱掘形は直径 0.3～0.4mのほぼ円形である。柱穴から土師器の小片が出土している。

ＳＢ115（第 51 図）

ＢⅡ区の北壁に位置する。西側半分は調査区外へ延びるが、桁行３間以上、梁行２間以上の東西棟の総柱建物と推定した。建物規模は桁行 4.6m以上、梁行 3.9m以上となる。柱間は桁間が西から 1.2m以上、1.7m、1.7mで、梁間は北から 2.2m、1.7mである。柱掘形は直径 0.4 ～0.5mの円形となる。柱穴からは土師器の小片が出土している。

ＳＢ116（第 51 図）

ＢⅡ区の北壁に位置する桁行２間、梁行２間の南北棟の建物で、ＳＢ115とほぼ向きが同じである。建物規模は桁行、梁行ともに 4.2mで、柱間は、桁間が北から 2.3m、1.9m、梁間は西から 1.9m、2.3mである。柱掘形は直径 0.4m前後の円形である。柱穴から土師器の小片が出土している。

ＳＢ118（第 51 図）

ＢⅡ区の北側に位置する桁行３間、梁行２間の東西棟の建物である。建物規模は、桁行 6.3m、梁行3.2mとなる。桁方向で柱穴を欠く部分があるが、柱間は桁間が西から 1.7m、1.3m、1.7m、1.6mで、梁間は 1.6mの等間となる。柱掘形は、直径0.5m前後の円形である。柱穴からは須恵器や土師器の小片が出土している。

ＳＢ119（第 52 図）

ＢⅡ区の北東に位置する桁行２間、梁行２間の東西棟の総柱建物である。建物規模は桁行 5.2m、梁

行4.8mとなる。柱間は桁間が西から2.7m、2.5m、梁間が北から2.5m、2.3mである。柱堀形は直径0.3～0.4mの円形となる。柱穴から須恵器や土師器の小片が出土している。

ＳＢ120（第51図）

ＢⅡ区の北東に位置する桁行２間、梁行２間の東西棟の総柱建物である。建物規模は桁行、梁行ともに2.8mとなる。柱間は桁間、梁間ともに1.4mの等間である。柱掘形は直径0.4～0.5mの不整形な円形となる。柱穴からは須恵器や土師器の小片が出土している。

ＳＢ121（第52図）

ＢⅡ区の北東に位置する桁行２間、梁行２間の東西棟の建物である。建物規模は、桁行4.0m、梁行が3.6mとなる。柱間は桁間が西から2.2m、1.8m、梁間は1.8mの等間である。柱堀形は直径0.2～0.3mの円形となる。柱穴から須恵器や土師器の小片が出土している。

ＳＢ124（第52図）

ＢⅡ区の北西に位置する桁行４間、梁行３間の南北棟の建物で、北東部分はＳＥ208に切られる。建物規模は桁行5.8m、梁行4.2mとなる。柱間は桁間が1.45mの等間、梁間も1.4mの等間である。柱掘形は直径0.3～0.5mのほぼ円形となる。柱穴から土師器の小片が出土している。

ＳＢ127（第52図）

ＢⅡ区の北側に位置する桁行２間、梁行２間の東西棟の総柱建物である。南側はＳＤ229に切られている。建物規模は桁行3.1m、梁行2.9mとなる。柱間は桁間が西から1.6m、1.5m、梁間が北から1.3m、1.6mである。柱掘形は直径0.5mの円形で、柱穴から土師器や須恵器の小片が出土した。

ＳＢ129（第56図）

ＢⅡ区の南東に位置する桁行２間、梁行２間の南北棟の総柱建物である。建物規模は桁行、梁行ともに3.5mである。柱間は桁間、梁間ともに1.75mの等間となる。柱掘形は直径0.3～0.4mの円形である。柱穴から土師器の小片が出土している。

ＳＢ130（第56図）

ＢⅡ区の北東に位置する桁行２間、梁行２間の南北棟の建物である。建物規模は桁行、梁行ともに3.2mである。柱間は桁間が1.6m、梁間も1.6mと等間となっている。柱掘形は直径0.5m程度のものが認められるが、概ね直径0.2mの円形である。柱穴から土師器片が出土している。

ＳＢ132（第51図）

ＢⅡ区のほぼ中央に位置する桁行２間、梁行２間の南北棟の総柱建物である。ＳＤ230やＳＤ235によって建物北側が切られている。建物規模は桁行4.2m、梁行3.8mである。柱間は桁間が2.1mの等間、梁間は西から2.0m、1.8mとなる。柱掘形は直径0.3mの円形である。柱穴からは土師器や須恵器の小片が出土している。

ＳＢ133（第51図）

ＢⅡ区の中央に位置する桁行２間、梁行２間の南北棟の総柱建物で、ＳＢ132とほぼ柱筋を揃えている。建物規模は桁行3.4 m、梁行3.2 mとなる。柱間は桁間が北から1.8 m、1.6 m、梁間は1.6 mの等間である。柱掘形は直径0.3 mの円形となる。柱穴から土師器や須恵器の小片が出土している。

ＳＢ135（第53図）

ＢⅡ区の南西端で検出した。東西２間、南北２間分を確認したに止まり、西側の大部分は調査区外である。建物規模は東西棟と考えた場合、桁行が6.8m、梁行5.2 m以上である。柱間は桁間3.4 m、梁間3.2m、2.0m以上を計り、柱間がやや広い。柱掘形は、直径0.7mと比較的大型のものである。柱穴から須恵器杯蓋（540）や土師器甕（541）が出土している。540はＴＫ209型式に併行しよう。

ＳＢ137 （第53図）

ＢⅡ区の東に位置する桁行２間、梁行２間の南北棟の総柱建物である。建物規模は桁行5.2m、梁行5.0mとなる。柱間は桁間が北から2.7m、2.5mで、梁間が西から2.4 m、2.6mである。柱掘形は直径0.3mほどの円形となる。柱穴からは土師器や須恵器の細片が出土している。

ＳＢ141 （第53図）

ＢⅡ区の南東に位置する桁行２間、梁行３間の南北棟の建物である。建物規模は、桁行5.1m、梁行3.0mとなる。柱間は、桁間が西から1.9m、1.6m、1.6m、梁間は1.5mの等間である。柱掘形は直径0.3～0.4mの円形である。柱穴からは土師器や須恵器の細

片が出土している。

ＳＢ142（第53図）

ＢⅡ区の南西に位置する桁行２間、梁行２間の東西棟の建物である。ＳＢ146との一部重複がみられる。建物規模は桁行4.2m、梁行3.0mとなる。柱間は、桁間が2.1mの等間、梁間も1.5mの等間である。柱掘形は直径0.3～0.5mの円形となる。柱穴から須恵器の細片が出土している。

ＳＢ144（第53図）

ＢⅡ区の南東で検出した桁行２間、梁行２間の南北棟の総柱建物である。建物規模は桁行3.3m、梁行2.7mとなる。柱間は桁間が北から1.8m、1.5m、梁行は1.3m、1.4mとなる。柱掘形は直径0.6mの円形である。柱掘形の大きさ、柱間の間隔から考え、倉庫の可能性がある。柱穴からは須恵器杯蓋（539）や土師器の小片が出土しているが、539はＴＫ209型式以降のものと考えられる。

ＳＢ145（第53図）

ＢⅡ区の南東に位置する桁行３間、梁行２間の南北棟の総柱建物である。ＳＨ73と大部分が重複する。建物規模は桁行4.7m、梁行3.8mとなる。柱間は桁間が北から1.7m、1.5m、1.5m、梁間は1.9mの等間である。柱掘形は0.2～0.4mと大きさにややばらつきがみられる。柱穴から須恵器や土師器の小片が出土している。

ＳＢ147（第51図）

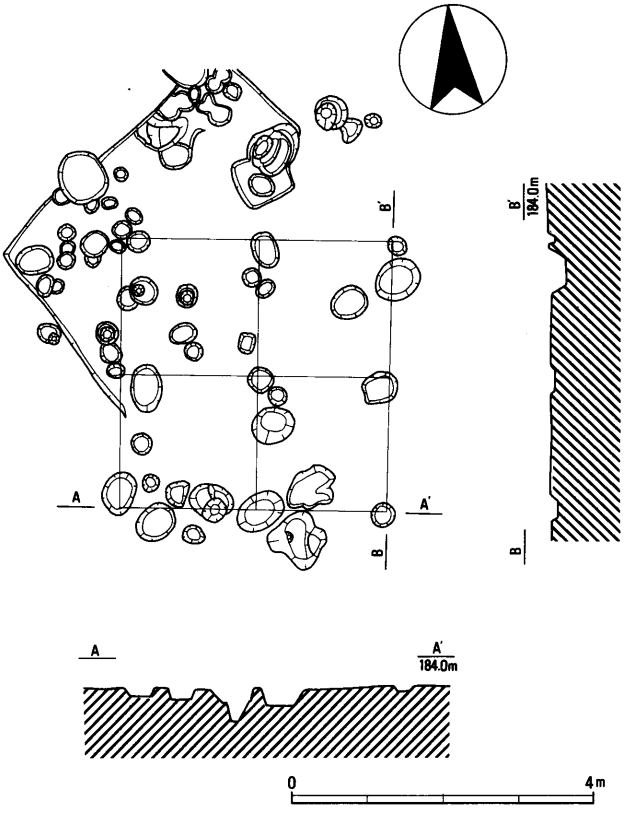
ＢⅡ区の南東に位置する桁行３間、梁行２間の東西棟の建物である。建物規模は、桁行5.6m、梁行3.0mとなる。柱間は桁間が西から1.8m、2.0m、1.8mで、梁間は1.5mの等間である。柱掘形は直径0.5mの円形となる。柱穴から須恵器や土師器の小片が出土している。

ｃ．土　坑

ＳＫ202（第57図）

ＢⅠ区北端よりに位置する、長軸約2.8m、短軸約2.0mのやや不整形な土坑である。深さは検出面から0.6mほどで、土坑底からやや浮いた状態で須恵器の杯、高杯、鉢や土師器甕などの土器群（590～605）が一括して出土した。時期的には７世紀後半から８世紀初頭頃のものが中心であろう。

ｄ．ピット



第６図　ＳＢ106遺構実測図（１：100）

建物としてまとまらないが、ピット内から須恵器や土師器甑などの遺物が出土している。ピットの分布を見る限り、ＢⅠ区からＢⅡ区までほぼ全域に広がっている。

Ｄ８－Ｐ８

ＢⅡ区北側中央に位置し、ＳＫ202の土坑底で検出した直径0.4mほどのピットである。出土遺物に土師器甑（610）や土師器甕（612）がある。

Ｑ12－Ｐ４

ＢⅡ区の南東に位置し、ＳＢ145の柱穴と大きく重複する。規模は直径0.7mの円形である。出土遺物に土師器杯（606・607）がある。

平安・鎌倉時代

掘立柱建物、土坑墓、井戸、溝などＢⅡ区を中心に多数の遺構が認められた。溝は比較的浅いものが多いが、溝埋土からは多数の瓦器椀や土師器皿が出土した。掘立柱建物はＢⅡ区の北側で大半を検出した。

ａ．掘立柱建物

ＳＢ110（第54図）

ＢⅠ区の南東に位置する桁行３間以上、梁行３間の南北棟の建物である。建物の規模は桁行6.0m以上、梁行5.1mである。柱間は桁間が1.8mの等間で梁間

は西から1.6m、1.6m、1.9mと東側1間がやや広い。柱掘形は直径は0.2～0.4mの円形となる。柱穴から土師器皿の小片が出土している。

ＳＢ117（第51図）

ＢⅡ区の北に位置する桁行4間、梁行2間の東西棟の建物である。建物規模は桁行5.2m、梁行3.0mとなる。柱間は、桁間が西から1.1m、1.5m、1.5m、1.1mで桁行の中央がやや広い。梁間は北から1.6m、1.4mである。柱掘形は直径0.3～0.5mの円形となる。柱穴から土師器皿や黒色土器Ａ類の小片が出土している。

ＳＢ122（第54図）

ＢⅡ区の北西に位置する桁行3間、梁行3間の南北棟の総柱建物である。建物規模は桁行、梁行ともに6.3mとなる。柱間はそれぞれ2.1mの等間である。柱堀形は直径0.3mの円形となっている。柱穴から瓦器椀や土師器皿の小片が出土している。

ＳＢ123（第54図）

ＢⅡ区の北西に位置する桁行3間、梁行3間の南北棟の総柱建物である。建物規模は桁行、梁行ともに3.6m、柱間もそれぞれ1.2mの等間となる。
柱掘形は直径0.5mの円形である。柱間の間隔や柱掘方の大きさから倉庫の可能性もある。柱穴から山田編年のⅡ段階第3型式に併行する瓦器椀（626）や瓦器皿（627）、土師器皿（628）が出土した。

ＳＢ125（第54図）

ＢⅡ区の北側に位置する桁行3間、梁行2間の東西棟の建物で、建物規模は桁行6.4m、梁行3.2mとなる。柱間は、桁間が西から2.4m、2.4m、1.6mと東側1間がやや狭い。梁間は1.6mの等間である。柱掘形は直径0.3～0.5mの不整形円形となる。柱穴から土師器皿（634・826）や瓦器片が出土している。

ＳＢ126（第52図）

ＢⅡ区の西に位置する桁行2間、梁行2間の東西棟の総柱建物である。建物規模は桁行3.8m、梁行3.3mとなる。柱間は、桁間が北から1.8m、2.0m、梁間は1.65mの等間である。柱掘形は直径0.3m程度の不整形な円形となる。柱穴から青磁椀や瓦器椀の小片が出土している。

ＳＢ131（第51図）

ＢⅡ区の北東に位置する桁行2間、梁行2間の東西棟の建物である。建物規模は桁行が4.2m、梁行が3.2mとなる。柱間は桁間が西から2.0m、2.2m、梁間は1.6mの等間である。柱掘形は直径0.3m前後のほぼ円形となっている。柱穴からは土師器皿や瓦器椀の小片が出土している。

ＳＢ136（第54図）

ＢⅡ区の東に位置する桁行2間、梁行2間の東西棟の建物である。建物規模は桁行4.4m、梁行3.8mとなる。柱間は桁間が西から2.2m、2.2m、梁間は1.9mの等間である。柱掘形は直径0.3mの円形である。柱穴から瓦器の小片が出土している。

ＳＢ138（第55図）

ＢⅡ区の東に位置する桁行3間、梁行2間の南北棟の総柱建物である。建物規模は桁行6.3m、梁行4.2mとなる。柱間は、桁間が北から1.8m、2.25m、2.25mで東側1間が狭い。梁間は、西から2.2m、2mである。柱掘形は直径0.4～0.5mの円形で比較的大きい。柱穴から土師器皿（830）、土師器羽釜や瓦器の小片が出土している。

ＳＢ139（第54図）

ＢⅡ区の東に位置する桁行2間、梁行2間の南北棟の建物である。建物規模は、桁行が4.0m、梁行が3.1mとなる。柱間は桁間が2.0mの等間、梁間は西から1.8m、1.3mと東側1間がやや狭い。柱掘形は、直径0.3mの円形である。柱穴から瓦器の細片が出土している。

ＳＢ140（第55図）

ＢⅡ区の東端に位置する桁行3間、梁行2間以上の南北棟の総柱建物である。先述のＳＢ138とは約3mの間隔をあけ、棟方向もほぼ等しい。規模は桁行6.6m、梁行3.7m以上で、柱間は桁間が2.2mの等間、梁間は2.7mと推定される。柱掘形は直径0.5mの円形で比較的大きい。柱穴から土師器羽釜や瓦器椀の細片が出土している。

ＳＢ146（第55図）

ＢⅡ区の南西に位置する桁行2間、梁行2間の南北棟の建物である。西側から北側にあるＳＤ238はこのＳＢ146を取り囲むように走る。建物規模は桁行4.6m、梁行4.5mとなり、柱間は桁間が北から2.2m、2.4m、梁間は2.25mの等間である。柱掘形は直径0.4mの円形である。柱穴から瓦器椀や土師器皿

の小片が出土している。

b．土坑墓

ＳＸ220（第59図）

ＢⅡ区西端に位置し、平面規模は長辺2.0m、短辺0.7mの隅丸長方形を呈する。深さは検出面から0.1mと浅い。棺痕跡は確認できなかった。遺物はいずれも副葬品と考えられ、墓坑北側で土師器皿（637～639・642）が正位の状態で、刀子（644）は墓坑北西で出土した。

ＳＸ221（第60図）

ＢⅡ区西側に位置する、直径約0.8mの円形の墓である。検出面からの深さは0.4mと考えられる。ＳＤ238と重複するが、溝より古い。遺物は、土師器羽釜（656）が墓中央に置かれた石に覆い被さる状態で、瓦器椀（654）は西側の壁側でみつかった。埋土からは瓦器椀（655）が出土した。654・655は山田編年のⅡ段階第3型式、土師器羽釜は菅原編年の大和Ｂ型に属しよう。瓦器椀はいずれも出土状況を見る限り溝よりの流れ込みの可能性も考えられる。

c．井戸

ＳＥ208（第58図）

ＢⅡ区の東に位置する、直径2.2m、深さ1.2mの円形の井戸である。井戸はテラス状に段を形成しており、井戸の底付近には人頭大の石の散乱がみられた。出土遺物に土師器杯（657～659）・皿（660）・甕（661）がある。

ＳＥ214（第58図）

ＢⅡ区中央やや西よりに位置する石組みの井戸である。井戸掘形は長軸3.0m、短軸2.0mの楕円形で石組み部分の内径は0.8mである。井戸本体は検出面から深さ1.6m程で底に達する。石組みは人頭大の石を比較的面をそろえ積み上げ、底に行くほどやや先細りする。図示し得なかったが、土師器皿や瓦器椀の小片が出土している。

d．溝

ＳＤ227・228

ＢⅡ区の南西に位置し、調査区の西壁に沿って緩やかにカーブする。全長30m、幅0.7～1.0m、深さ0.6～0.8mの規模で、ほぼ並行する。途中、2条の溝は合流し、この付近で人頭大の集石が見られた。出土遺物は、集石部を中心に土師器皿（662～682）・羽釜（720・721）や瓦器椀（722・723・769～779）、山茶碗（713）、陶器鉢（714）、土錘（717～719）など多数の遺物がみつかっている。

瓦器椀は、暗文が斜格子文となる（685～689・722・723）と、ジグザグ文の（690～702）、連結輪状文の（703～711）の3種が認められた。山田編年のⅠ段階第2型式～Ⅱ段階第2型式に併行しよう。

土師器皿には「て」の字状口縁皿の系列にあると考えられる（668～670・673）と、口縁が外反するもの（662～667・682）、口縁が内湾するもの（675～681）がある。

ＳＤ229

ＢⅡ区のほぼ中央に位置し、溝の東端で南に向かい鉤の手状に曲がる。規模は長さ24m、幅1mほどである。溝から出土した須恵器杯身（547）は遺構との切り合いなどから流れ込みと判断される。

ＳＤ230

ＢⅡ区中央やや南西よりに位置し、ＳＤ229と同様に鍵の手状に南側に曲がる。規模は全長25m、幅0.7～1.0m。深さは0.1mと浅い。土錘（726）が出土している。

ＳＤ231～ＳＤ234

ＢⅡ区の南西に位置し、ＳＤ230にほぼ並行するように4条の東西溝が走る。それぞれ2mの等間隔である。溝の規模は、ＳＤ231・232が全長11m、幅0.2～0.4m、深さ0.1mで、ＳＤ233・234は全長5.7m、幅0.2～0.4m、深さは0.1mである。出土遺物は、ＳＤ233から瓦器椀（793）、ＳＤ234から土師器皿（727）と瓦器椀（730）、土錘（725）が出土した。瓦器椀はいずれも外面の磨きを欠いており、山田編年のⅢ段階第1型式に併行しよう。

ＳＤ235

ＢⅡ区の南西に位置する南北溝で、ちょうどＳＤ229からＳＫ213に連結する。規模は全長5m、幅0.6mほどの小規模なものである。出土遺物は瓦器や土師器皿の小片がある。

ＳＤ236

ＢⅡ区の南西に位置し、溝西端で鉤の手状に南に曲がる。規模は全長8m、幅0.6m、深さ0.1mでＳＤ238とほぼ溝の方向が等しい。南側はＳＤ238と一部重複する。出土遺物は土師器皿（728・731）や

山田編年のⅡ段階第１型式に併行すると考えられる瓦器椀（732）がある。

ＳＤ238

ＢⅡ区の南西に位置し、ＳＤ236同様に鉤の手状に曲がる。規模は全長25m、幅0.8m、深さ0.3mである。溝南側にはＳＡ114・ＳＢ146がある。出土遺物は、土師器皿（733～768）、瓦器椀（769～779）、瓦器皿（760・780～790）などを中心に比較的多くみつかった。

瓦器椀は、山田編年のⅡ段階第１・２型式に併行するものが中心であろう。瓦器皿は口径9.5m程度で、口縁が外反するものが多い。

土師器皿は、口縁が外反するもの（733～739・746～759・761～766）と、「て」の字状になるもの（740～745）口縁が直線的に立ちあがるもの（767・768）がある。

ＳＤ239

ＢⅡ区南西に位置する南北溝である。溝の南側は削平をうけ、徐々に浅くなる。規模は全長4.7m以上、幅0.6mである。土師器皿（799）が出土した。

ＳＤ240

ＢⅡ区南西に位置する南北溝である。溝の北側はＳＤ238と重複し、南側はＳＤ242とつながる。規模は全長９m、幅0.7m、深さ0.4mである。出土遺物に土師器皿（795～797）や、山田編年のⅡ段階第１・２型式に併行する瓦器椀（800）がある。

ＳＤ241

ＢⅡ区の南東に位置する南北溝で、東に向かってやや蛇行する。規模は全長10m、幅0.4mほどである。溝中央がＳＤ242と重複するが、切り合いは明らかでない。遺物は特に認められなかった。

ＳＤ242

ＢⅡ区の南端に位置する東西溝である。溝の両端がＳＤ228、ＳＤ241とつながる。規模は全長23mで幅0.5m、深さ0.3mである。土師器皿（802～809・811・814）や瓦器椀（801・815・817）が出土している。瓦器椀は、山田編年のⅡ段階第１型式～第２型式に併行しよう。土師器皿は、口縁が外反するもの（802～807・809）と口縁がまっすぐ外側に延びるもの（808）が認められる。

ｅ．土　坑

ＳＫ212

ＢⅡ区中央のやや西よりに位置する土坑である。規模は長軸2.2m、短軸0.9m、深さ0.7mの長方形を呈する。出土遺物に土師器皿（629）がある。

ＳＫ213

ＢⅡ区中央のやや西よりに位置する土坑である。規模は長軸約4.2m、短軸約2.3m、深さ0.3mの方形で、土坑両端はＳＤ232とＳＤ234を切る。遺物は土師器皿（630）や瓦器椀や土師器羽釜、白磁などの小片が出土している。

ＳＫ216

ＢⅡ区のほぼ中央に位置する土坑である。規模は直径1.5m、深さ0.3mのほぼ円形を呈する。出土遺物に瓦器椀や黒色土器などの小片が出土している。

ＳＫ218

ＢⅡ区の南端に位置する集石土坑である。規模は一辺4.5mのほぼ正方形、検出面から土坑床面までの深さは0.6mである。土坑内には、人頭大から拳大の大きさの石が乱雑に置かれていた。土坑南辺はＳＤ242と一部重複し、また遺物も時期的に近く溝と関連性が考えられる。出土遺物は、瓦器椀（645・650）や土師器皿（632・633・635・636・646・647）・羽釜（649・652・658）がある。瓦器椀は山田編年のⅡ段階第２型式に併行しよう。

ｆ．柱　列

ＳＡ112（第56図）

ＢⅠ地区の東側に位置し、全長約22mにわたり南北方向のピット列を検出した。この延長にあたるＢⅡ区には続く様子はうかがえない。北側から約11mまでは南北５間、柱間1.7～1.8mのほぼ等間で柵状となっているが、これより南側は、柱間が約0.2mと狭くなっている。明確な遺物は認められなかったが柱列の方位がＮ－17°－ｗとなり、ＳＢ122・123、ＳＢ138・140の棟方向とほぼ一致する。

ＳＡ114（第55図）

ＢⅡ区南側で検出した。区画溝と考えられるＳＤ238の北側に沿う東西方向の柵と思われ、柱間は2.2mほどである。柱穴から特に遺物は認められない。

ｇ．ピット

遺物がみとめられたピットをみる限り、多数の溝を検出したＢⅡ区南東付近に集中している。出土遺

物は土師器皿が大半である。

Ｓ９－Ｐ１

ＢⅡ区南東に位置し、ＳＤ241の東隣にある。ピットの規模は直径0.4ｍで、土師器皿（820）・瓦器椀（822）が出土している。

遺構名	間（m）×間（m）	柱間 桁間（m）	柱間 梁間（m）	棟方向	備考
ＳＢ110	3(6.0)～×1(5.1)	北から1.8+1.8+1.8～	西から1.6+1.6+1.9	Ｎ－39°－Ｗ	北半分のみ
ＳＢ117	4(5.2)×2(3.0)	西から1.1+1.5+1.5+1.1	北から1.6+1.4	Ｅ－40°－Ｎ	東西棟
ＳＢ122	3(6.3)×3(6.3)	北から2.1+2.1+2.1	西から2.1+2.1+2.1	Ｎ－17°－Ｗ	東西棟　総柱
ＳＢ123	3(3.6)×3(3.6)	北から1.2+1.2+1.2	西から1.2+1.2+1.2	Ｎ－19°－Ｗ	東西棟　総柱
ＳＢ125	3(6.4)×2(3.2)	西から2.4+2.4+1.6	北から1.6+1.6	Ｅ－10°－Ｎ	東西棟
ＳＢ126	2(3.8)×2(3.3)	西から1.8+2.0	北から1.65+1.65	Ｅ－45°－Ｓ	東西棟
ＳＢ131	2(4.2)×2(3.2)	西から2.0+2.2	北から1.6+1.6	Ｅ－31°－Ｎ	東西棟
ＳＢ136	2(4.4)×2(3.8)	西から2.2+2.2	北から1.9+1.9	Ｅ－22°－Ｎ	東西棟
ＳＢ138	3(6.3)×2(4.2)	北から1.8+2.25+2.25	西から2.2+2.0	Ｎ－18°－Ｗ	棟方向がＳＢ140とほぼ同じ
ＳＢ139	2(4.0)×2(3.1)	北から2.0+2.0	西から1.8+1.3	Ｎ－21°－Ｗ	南北棟
ＳＢ140	3(6.6)×2(3.7)	北から2.2+2,2+2.2	西から2.7+1.0～	Ｎ－19°－Ｗ	棟方向はＳＢ138と同じ
ＳＢ146	2(4.6)×2(4.5)	北から2.2+2.4	西から2.25+2.25	Ｎ－10°－Ｗ	南北棟　溝が囲む

第９表　Ｂ地区　平安末～鎌倉時代掘立柱建物一覧

遺構名	溝方向	幅(m)	全長(m)	深さ(m)	備考
ＳＤ227	Ｎ－31°－Ｗ	0.7～1.0	30.0～	0.6～0.8	グリッド０－２付近に集石
ＳＤ228	〃	〃	〃	〃	ＳＤ227とほぼ並行
ＳＤ229	Ｎ－33°－Ｗ	1.0	24.0	0.8	ＳＤ224より新しい　逆Ｌ字の溝
ＳＤ230	〃	0.7～1.0	25.0	0.1	ＳＤ229と溝方向は同じ　逆Ｌ字の溝
ＳＤ231	Ｅ－33°－Ｎ	0.2～0.4	11.0	0.1	ＳＤ229・230の東西方向とほぼ並行
ＳＤ232	〃	〃	11.0	〃	〃
ＳＤ233	〃	〃	10.0	〃	〃
ＳＤ234	〃	〃	5.0	〃	〃
ＳＤ235	Ｎ－30°－Ｗ	0.6	5.0	0.1	
ＳＤ236	Ｎ－７°－Ｗ	0.6	8.0	0.1	ＳＤ238とほぼ並行　逆Ｌ字の溝
ＳＤ238	〃	0.8	25.0	0.3	ＳＢ146を取り囲む　逆Ｌ字の溝
ＳＤ239	〃	0.6	4.7	0.1	溝の南側は削平
ＳＤ240	〃	0.7	9.0	0.4	ＳＤ238とＳＤ242につながる
ＳＤ241	Ｎ－23°－Ｗ	0.4	10.0	0.3	やや西に蛇行
ＳＤ242	Ｅ－７°－Ｎ	0.5	23.0	0.3	ＳＤ228とＳＤ241につながる

第10表　Ｂ地区　平安末～鎌倉時代溝一覧

3　時期不明の遺構

Ａ地区

ＳＨ13（第11図）

ＡＩ区の南端に位置する。住居北部分のみの検出に止まる。全体規模は不明だが残存する東西辺は3.7ｍを計る。出土遺物は特に認められなかった。

ＳＨ27（第28図）

ＡⅡ区の西壁付近に位置し、検出は北西隅のみに止まった。調査区の壁際の断面に、焼土の広がりが認められており、調査区外に竈が存在した可能性がある。出土遺物は特に認められなかった。

ＳＨ30（第11図）

ＡⅡ区の南西に位置する。北側はＳＨ27と大きく重複する。残存する南北辺は3.4ｍを計る。焼土が住居中央で認められた。出土遺物は特になかった。

Ｂ地区

ＳＨ60（第34図）

ＢＩ区の北西に位置する。住居の南側半分のみで残存する東西辺は４ｍを計る。住居北壁で竈跡と考える焼土の広がりがある。遺物は特になかった。

ＳＨ75（第44図）

ＢⅡ区の南東に位置する。削平や重複のため残存状態は悪い。平面規模は残存する東西辺で５ｍを計る。住居の北側中央では竈跡と推定される焼土の広がりが認められた。出土遺物に、須恵器杯身や土師器甕の小片があるが時期決定に至らない。

ＳＨ80（第48図）

ＢⅢ区の中央に位置する。住居の北半分は調査区外へ伸びる。残存部分より、平面形は東西３ｍほどの方形と思われる。主柱穴や貯蔵穴など住居に伴う内部施設は一切認められなかった。出土遺物に須恵器杯身や甕の小片があるが、時期決定に至らない。

ＳＢ134（第54図）

ＢⅡ区南西に位置する東西２間、南北２間の南北棟の総柱建物で、ＳＤ232とほぼ直交する。規模は桁行4.1ｍ、梁行3.9ｍ、柱間は桁間が北から2.0ｍ、2.1ｍ、梁間は1.9ｍの等間である。柱掘形は直径0.4ｍの円形となる。柱穴から土師器、須恵器の細片や土師器皿が出土したが、溝との切り合いから時期不明とした。建物方向などから、平安時代後期以降である可能性がある。

ＳＤ243

ＢⅣ区の東端で検出した。溝の東半分は調査区外だが、幅0.8ｍ以上、深さ1.4ｍの南北溝と思われ

る。A地区の大溝と形態が似ており、これと同じような溝と考えたいが、出土遺物がなく、明確な時期決定はできない。

4　包含層遺物

調査区内では、A・B地区を中心に古墳時代から鎌倉時代にかけての遺物が数多く出土している。ここでは主要なもののみ見ていきたい。

A地区

(383) の須恵器杯身は、底部外面に×状のヘラ記号をもつ。(385・386) は須恵器杯身で、底部内面に同心円状の当て具痕を残す。石製品の (459・460) は、砥石で両面ともに研ぎ減りが著しい。

B地区

(857) は須恵器杯蓋で、天井部内面に同心円状の当て具痕を残す。(872) は須恵器皿で底部外面に「安」の刻書が見られる。(954) は白磁合子で、完存である。

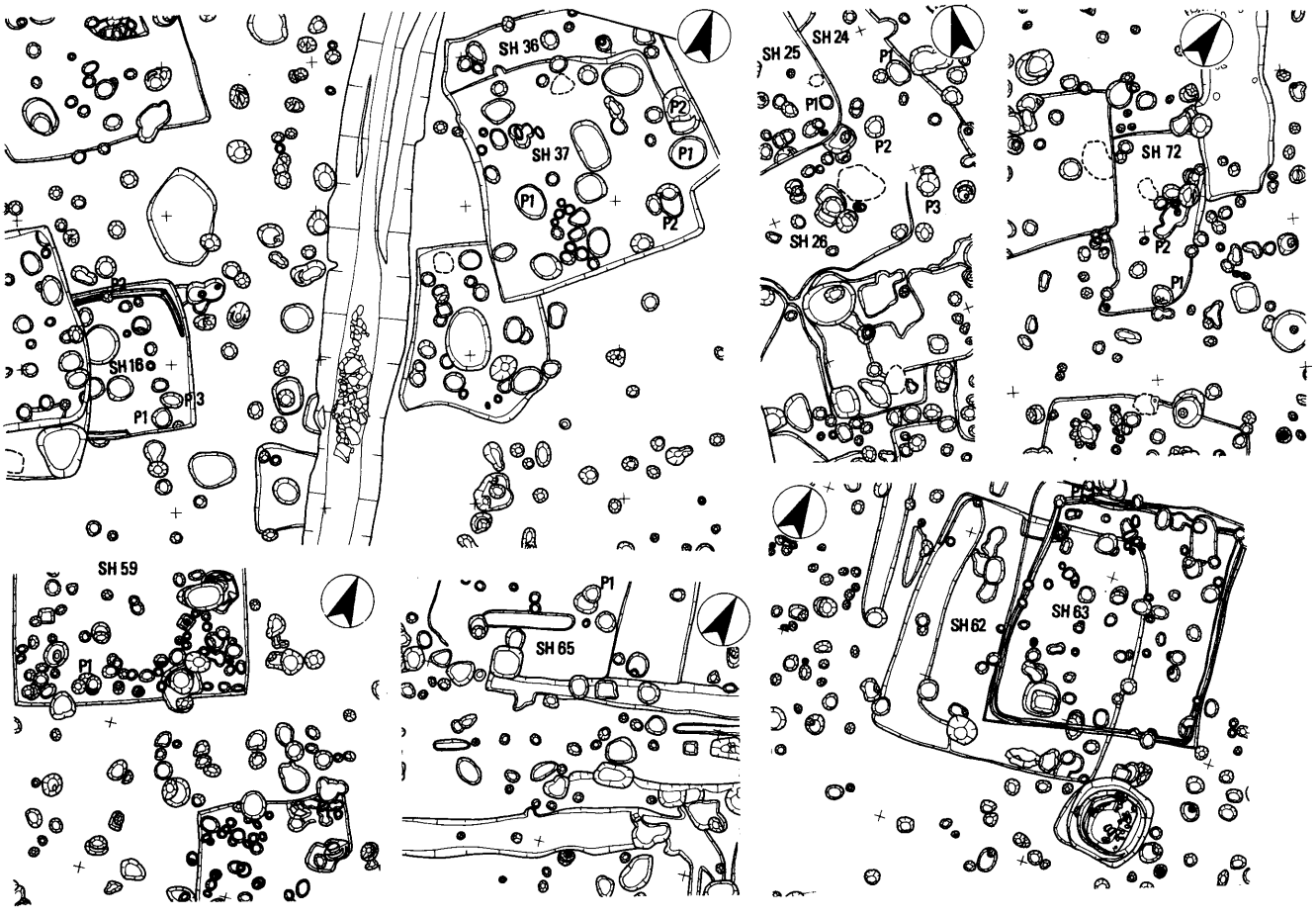
製塩土器は (465) と (1001) がある。(465) は焼塩土器の可能性があり、外面に籾殻痕、内面には布目痕を明瞭に残す。(1001) はいわゆる志摩式製塩土器である。

鉄製品は (1014～1016) がある。(1014) は全長39cm、最大幅3.6cmの片刃の小刀で、SD234の上面で出土した。部分的に木質の付着が見られ鞘に納められた状態であった可能性がある。(1015) は全長30.7cm、最大幅2.1cmの小刀で、SH59の上面で出土した。

4　C地区の調査

C地区は、調査区のうち最も西に位置し、地形的にも標高約181mともっとも低い。現況は水田で耕作による削平を著しく受けていた。

調査区内の土層は、表土直下に淡灰褐色砂質土が堆積し、表土から約0.8mほどで地山の礫混じりの明灰黄色砂質土に達する。遺構は、土坑3基や溝1条のほかピットを検出したが、これらの遺構の明確な時期は不明である。



第7図　A・B地区　竪穴住居実測図（1：100）

遺構名	出土遺物	備　考	時期
E23－P2	土師器杯142・143・150	AⅠ区	古墳
	須恵器杯蓋141	AⅠ区	古墳
E23－P3	須恵器杯蓋125	AⅠ区	古墳
F23－P3	土師器杯192、坩194	AⅠ区	古墳
F23－P4	土師器甕198	AⅠ区	古墳
F23－P7	土師器杯179・185	AⅠ区	古墳
F24－P5	土師器杯182	AⅠ区	古墳
F24－P6	土師器坩220	AⅠ区、SH7内	古墳
F24－P8	須恵器杯蓋126	AⅠ区	古墳
F1－P3	製塩土器461	AⅠ区	古墳
F2－P1	須恵器杯身158	AⅠ区	古墳
〃	土師器甕162	AⅠ区	古墳
F2－P4	土師器甕199	AⅠ区	古墳
F2－P6	須恵器高杯186	AⅠ区	古墳
〃	土師器甕187	AⅠ区	古墳
G1－P2	土師器甕212	AⅠ区	古墳
G1－P3	須恵器杯蓋129	AⅠ区	古墳
G1－P7	須恵器杯身137	AⅠ区	古墳
G2－P5	土師器甕218	AⅠ区	古墳
G2－P6	土師器杯178	AⅠ区	古墳
G2－P8	土師器甕200	AⅠ区	古墳
G3－P5	須恵器杯蓋128	AⅠ区	古墳
H2－P1	土師器甕171	AⅠ区	古墳
H2－P7	土師器坩222、甕226	AⅠ区	古墳
I1－P5	土師器高杯228	AⅠ区	古墳
I2－P2	土師器高杯225、229	AⅠ区	古墳
I2－P8	土師器甑156	AⅠ区	古墳
〃	須恵器高杯144	AⅠ区	古墳
J1－P3	土師器甕197・204	AⅠ区	古墳
J3－P9	須恵器高杯蓋130	AⅠ区	古墳
K2－P1	須恵器杯身134	AⅠ区	古墳
K3－P2	須恵器杯身136	AⅠ区	古墳

遺構名	出土遺物	備　考	時　期
N25－P1	須恵器杯身139	AⅡ区	古墳
O22－P1	土師器杯183	AⅡ区	古墳
P1－P2	土師器杯184	AⅡ区	古墳
Q20－P1	土師器甕201	AⅡ区	古墳
Q24－P1	土師器杯176	AⅡ区	古墳
R1－P6	須恵器杯蓋127	AⅡ区	古墳
S21－P1	須恵器杯身131、高杯140	AⅡ区	古墳
T20－P1	須恵器杯蓋124	AⅡ区	古墳
U20－P1	土師器甕205	AⅡ区	古墳
U20－P2	土師器甕208	AⅡ区	古墳
V23－P2	土師器杯175・189	AⅢ区	古墳
A2－P1	土師器甕214	AⅢ区	古墳
I25－P9	土師器Ⅲ348	AⅠ区	平安～鎌倉
I25－P10	土師器Ⅲ346	AⅠ区	平安～鎌倉
I1－P2	瓦器椀363	AⅠ区	平安～鎌倉
I1－P4	土師器Ⅲ343	AⅠ区	平安～鎌倉
I1－P6	土師器Ⅲ351～353	AⅠ区　一括か	平安～鎌倉
〃	白磁椀364	AⅠ区　一括か	平安～鎌倉
I1－P7	土師器Ⅲ354	AⅠ区	平安～鎌倉
I1－P11	土師器Ⅲ344・345	AⅠ区	平安～鎌倉
I2－P1	瓦器Ⅲ361	AⅠ区	平安～鎌倉
I2－P10	土　錘359	AⅠ区	平安～鎌倉
I3－P9	土師器Ⅲ349・355	AⅠ区	平安～鎌倉
J3－P1	土師器Ⅲ350	AⅠ区	平安～鎌倉
K3－P1	土師器Ⅲ342	AⅠ区	平安～鎌倉
R2－P6	土　錘360	AⅢ区	平安～鎌倉
T24－P4	土師器Ⅲ347	AⅢ区	平安～鎌倉
T2－P2	瓦器Ⅲ362	AⅢ区	平安～鎌倉
U7－P1	土師器蓋356	AⅢ区	平安～鎌倉
〃	陶器鉢365	AⅢ区	平安～鎌倉
V11－P1	土　錘358	AⅣ区	平安～鎌倉

第11表　A地区ピット出土遺物一覧

遺構名	出土遺物	備　考	時　期
F5－P2	須恵器高杯582	BⅠ区	古墳
F5－P9	須恵器杯蓋565	BⅠ区	古墳
F8－P1	土師器甕578	BⅠ区	古墳
F8－P2	須恵器杯身549・550	BⅠ区	古墳
〃	土師器甕551～554	BⅠ区	古墳
F9－P4	須恵器杯蓋567	BⅠ区	古墳
F10－P2	土師器甕585	BⅠ区	古墳
F12－P1	須恵器杯身571	BⅠ区	古墳
G5－P7	土師器二重口縁壺575	BⅠ区	古墳
G6－P2	土師器甕586	BⅠ区	古墳
G6－P11	土師器甕558・559	BⅠ区	古墳
G8－P11	須恵器杯身574	BⅠ区	古墳
H10－P6	須恵器杯身580	BⅠ区	古墳
H2－P1	土師器甕576	BⅠ区	古墳
L5－P1	土師器杯584	BⅡ区	古墳
L9－P3	土師器甕561	BⅡ区	古墳
M24－P1	須恵器杯身570	BⅡ区	古墳
M5－P10	土師器甕560	BⅡ区	古墳
N11－P9	土師器杯581	BⅡ区	古墳
O2－P1	須恵器杯身569・573	BⅡ区	古墳
P3－P1	須恵器杯蓋562	BⅡ区	古墳
P5－P2	須恵器杯蓋563	BⅡ区	古墳
Q12－P4	土師器杯583	BⅡ区	古墳
S10－P2	須恵器杯身579	BⅡ区	古墳
T9－P3	土師器甕577	BⅡ区	古墳
T10－P4	須恵器杯蓋566	BⅡ区	古墳
U14－P1	須恵器杯身572	BⅣ区	古墳
U17－P3	須恵器杯蓋564	BⅣ区	古墳
A13－P1	土師器杯608	BⅠ区	飛鳥～奈良
C7－P1	土師器甑620	BⅠ区	飛鳥～奈良
D7－P2	土師器甕609・611	BⅠ区	飛鳥～奈良
D8－P8	土師器甑610	BⅠ区	飛鳥～奈良
〃	土師器甕612	BⅠ区	飛鳥～奈良
F8－P3	須恵器壺614	BⅠ区	飛鳥～奈良
H3－P1	須恵器杯身616	BⅡ区	飛鳥～奈良

遺構名	出土遺物	備　考	時　期
K1－P4	土師器甕623	BⅡ区	飛鳥～奈良
K11－P4	須恵器広口壺613	BⅡ区	飛鳥～奈良
L7－P2	土師器甕624	BⅡ区	飛鳥～奈良
M1－P7	土師器杯619	BⅡ区	飛鳥～奈良
M10－P1	土師器把手付甕625	BⅡ区	飛鳥～奈良
N9－P5	須恵器杯身617	BⅡ区	飛鳥～奈良
O12－P5	土師器甕621	BⅡ区	飛鳥～奈良
Q5－P3	須恵器鉢615	BⅡ区	飛鳥～奈良
Q12－P4	土師器杯606・607	BⅡ区	飛鳥～奈良
R7－P1	土師器甕622	BⅡ区	飛鳥～奈良
S10－P3	土師器甕618	BⅡ区	飛鳥～奈良
A12－P2	土師器Ⅲ829	BⅠ区	平安～鎌倉
F8－P8	土師器Ⅲ834	BⅠ区	平安～鎌倉
H25－P1	土師器Ⅲ825	BⅡ区	平安～鎌倉
H3－P2	土　錘845	BⅡ区	平安～鎌倉
H3－P6	土　錘835	BⅡ区	平安～鎌倉
I2－P2	土　錘842	BⅡ区	平安～鎌倉
J25－P9	土　錘841	BⅡ区	平安～鎌倉
K1－P5	土師器Ⅲ839	BⅡ区	平安～鎌倉
L25－P3	土　錘843	BⅡ区	平安～鎌倉
L4－P2	土師器羽釜847	BⅡ区	平安～鎌倉
L5－P2	白磁椀824	BⅡ区	平安～鎌倉
M4－P2	土　錘845	BⅡ区	平安～鎌倉
M5－P2	土師器羽釜846	BⅡ区	平安～鎌倉
N3－P2	土師器Ⅲ831	BⅡ区	平安～鎌倉
N3－P5	土師器Ⅲ832	BⅡ区	平安～鎌倉
P7－P1	瓦器椀816	BⅡ区	平安～鎌倉
Q4－P2	土師器Ⅲ829・830	BⅡ区	平安～鎌倉
R4－P1	土師器Ⅲ840	BⅡ区	平安～鎌倉
R8－P1	土師器Ⅲ833	BⅡ区	平安～鎌倉
S8－P2	土師器Ⅲ838	BⅡ区	平安～鎌倉
S9－P1	土師器Ⅲ820	BⅡ区	平安～鎌倉
〃	瓦器椀822	BⅡ区	平安～鎌倉
S12－P3	土師器Ⅲ836	BⅡ区	平安～鎌倉

第12表　B地区ピット出土遺物一覧

Ⅳ.調査成果のまとめ

今回の発掘調査で、中出向遺跡では縄文時代から鎌倉時代に至るまで集落が断続的に営まれたことが明らかとなった。ここで、調査成果を踏まえ、若干のまとめをおこなってみたい。

1　縄文時代の状況

A・B地区の包含層や遺構中から神宮寺式に比定される早期の押型文土器を中心に、縄文早期、中・後期までの土器も出土している。縄文時代の遺構については明確でなく、遺構出土例のものも混入品と考えられる。しかし、土器の分布を見る限りでは、AⅡ区の南側にやや集中がみられ、周辺に竪穴住居などの何らかの遺構が存在していた可能性は十分考えられる。近年、本遺跡周辺の花代遺跡や東出遺跡[10]などでは、縄文時代の遺構こそ検出されていないが、大川式や大鼻式に遡る早期の押型文土器が大量に見つかっている。中出向遺跡を含め前深瀬川流域一帯に当時期の活発な人間活動があったことを考慮しておく必要があろう。

2　古墳時代の集落変遷

6世紀代の竪穴住居70棟や掘立柱建物4棟が検出され、古墳時代後期の集落が広範囲に広がっていることが明らかとなった。竪穴住居は数棟がまとまりを持ち、いくつかの住居群を形成している。ここでは出土須恵器により集落の時期を4期に区分し、各時期の集落の状況をみていくこととしたい。

Ⅰ期　田辺編年のTK23～TK47型式に併行する5世紀末から6世紀初頭と考えられる。調査区のA地区を中心に18棟の竪穴住居がある。分布状況を見ると竪穴住居の3つの住居群に分かれ、SH1～9とSH36・37に住居同士の重複が認められる。このうちSH1～9はⅢ期にまで存続が認められるが各住居の時期は明確にできなかった。

住居の規模は、SH24が一辺が9mと最も大型で一辺4m～5mのSH72・73、一辺3mのSH48が続く。住居規模による出土遺物の顕著な格差は見られないが、SH36・37からミニチュア土器や土師器甕・杯がまとまって出土した。

Ⅱ期　田辺編年のMT15型式に併行する6世紀前半と考えられる。13棟の竪穴住居があり、Ⅰ期と同様に3つの住居群が認められる。住居の規模は一辺が3～4mとなるものが大半で、大型の住居は認められない。住居規模と出土遺物に格差はないが、SH45の貯蔵穴内とSH16のピットから製塩土器がみつかっている。

Ⅲ期　田辺編年のTK10型式に併行する6世紀中葉と考えられる。37棟の竪穴住居を検出した他、掘立柱建物3棟も認められる。重複する住居が多く、切り合い関係からⅢ期を更に2～3時期に細分できるかもしれない。住居の分布を見ると、BⅡ区西側の住居群を含めて、4つの住居群が形成されると考えられる。このうち、AⅡ区南西のb群は10数棟の住居が隙間なく密集し、重複も激しい。住居規模は一辺が6m、一辺が5m、一辺が3mの3つに分かれ、b群に一辺6mの同規模の住居が集中している。なお、住居内の出土遺物と住居規模には目立った格差は見られない。

Ⅳ期　田辺編年のTK43型式に併行する6世紀後半と考えられ、17棟の竪穴住居を検出している。また7世紀初頭としたSH77もこの時期に遡る可能性がある。住居群はⅢ期と比べ、調査区南側を中心に広がっている。住居群は4つに分かれると考えられる。BⅡ区のb・c群のように重複住居を含む7棟の住居がほぼ一定の間隔を置いて分布するのも認められている。住居規模は、一辺が6m、一辺5m、一辺4m、一辺3mと4つに分かれているが、出土遺物にはやはり格差は認められない。

小結　中出向遺跡の古墳時代集落は5世紀末に造営を開始し、6世紀中葉にピークを迎える。その後、7世紀代にも集落は継続すると考えられるが、竪穴住居数は激減し、7世紀前半までの5棟を確認したに過ぎない。住居群はⅢ期以降、同一の場所での建替えと考えられる住居群が多く認められるようになり、調査区南側への拡散が進んでいく。

3　遺跡周辺の群集墳との関係について

中出向遺跡の南側に広がる丘陵一帯には、多数の群集墳が築かれており、中出向古墳群をはじめ、間

処古墳群、深谷古墳群など多くの群集墳が密集していることがわかる。中出向古墳群は、これらの群集墳中、最大規模とされ全25基の古墳からなる。発掘調査が行われておらず、詳細な造営時期は不明であるが、横穴式石室を主体部としていることから時期は、6世紀中葉～後半と推定される[11]。これに近接する中出向遺跡は、出土遺物から古墳群との時期差はなく、また集落の立地から考えても、当遺跡と古墳群の造営集団との密接な関係が想定されよう。

さて、中出向遺跡の竪穴住居内と掘立柱建物の柱穴から、口縁端部外面に刻み目をもつ須恵器杯蓋が出土している。こうした杯蓋は、TK10～TK43型式併行期の須恵器に多く見られ、伊賀地方では上野市・久米山48号墳、奥城寺1号墳や青山町・桐ヶ谷15号墳など群集墳を中心に出土している[12]。そして、分布をみると、本遺跡のある阿保小盆地内や、隣接する比土小盆地周辺に比較的まとまりがあるといい[13]、本集落の性格を考える上でも興味深い。

4　古墳時代の製塩土器について

A地区の出土した遺物の中で製塩土器が注目される。それぞれ筒型丸底状の器形で、大阪湾沿岸を産地とするものと推定されるが[14]、外面にタタキ目を施す（464）と、灰白色の須恵器に近い硬質の焼成の（461）については、調整や焼成がやや異なる。タタキ目をもつものについては、備讃Va式[15]に類似し、備讃瀬戸地域からのものである可能性が高い。時期は、6世紀前半の竪穴住居から出土した（462～464）より、古墳時代後半のものと推定される。

県内の古墳時代の製塩土器については不明な点が多いが、塩の流通状況を考えるうえで、重要な資料となった。なお、B地区から出土した布目痕のある（465）も大阪湾沿岸のものと考えられるが、時期的に新しく奈良時代以降の所産である。

5　飛鳥・奈良時代の掘立柱建物

今回の調査で、当時期の遺構として竪穴住居5棟と掘立柱建物41棟を確認した。竪穴住居は、7世紀前半頃までに収まり、この時期以降の住居は一切認められない。掘立柱建物はB地区を中心に41棟を確認しており、2間×2間の総柱建物となるものが比較的が多い。建物の主軸方向を見ると、北への振れが、東に10°以内に収まるもの、振れが東に20～30°に収まるもの、振れが西に20～30°に納ま

第8図　中出向遺跡周辺図の古墳群（1：10,000）

A．中出向遺跡　B．花山北古墳群　C．深谷東古墳群　D．深谷古墳群　E．狐塚古墳群
F．間処北古墳群　G．間処北古墳群　H．中出向古墳群　I．峯台古墳群　J．峯台東古墳群
K．花山古墳群　L．花山東古墳群　M．伝息速別命墓古墳

るものにまとまりが見られ、棟方向によりいくつかにグルーピングできる可能性はある。時期は、出土遺物が小片のため各建物の詳細な時期は不明だが、包含層遺物などから考え、7世紀初頭から8世紀末頃にほぼおさまると推定される。

また、当時期の特殊な遺物として、BⅡ区北側の包含層中から出土した「安」の刻書須恵器がある。県内では上野市の唐木谷遺跡[16]や伊賀国府跡などに類例がある。

6　平安末期以降の遺構変遷について

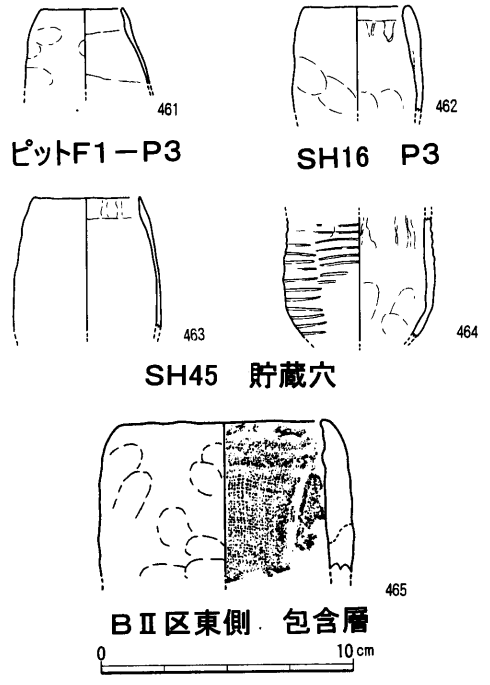
掘立柱建物や溝などを検出した。溝については、現在の字界に沿うものが含まれ、区画に伴う溝が多い。掘立柱建物もこれらの溝と棟方向が一致する。ここでは溝と建物を中心に遺構変遷をみていく。

Ⅰ期　掘立柱建物2棟と井戸がある。SB110とSB117の建物主軸方向は北への振れが西に39～40°に収まる。SB110から黒色土器A類の小片が出土していることから、調査区に溝が掘削される11世紀以前と考えられる。

Ⅱ期　底部内面の暗文が格子目もしくはジグザグ状となる瓦器椀が出土する山田編年のⅠ段階2・3型式に併行し11世紀中頃から11世紀末と考えられる。この時期、調査区西端にSD227・228が東端にはSD224が設けられる。溝のうち、SD227・228は字中出向と間処の字界とほぼ一致している。掘立柱建物は、建物の主軸方向が振れが8°以内のSB85がSD224の溝方向に近い。

Ⅲ－A期　底部内面の暗文が2重もしくは1重の連結輪状となる瓦器椀が出土する山田編年のⅡ段階1～2型式に併行し、12世紀初頭から12世紀中頃と考えられる。この時期の溝は、Ⅱ期のSD227・228のほか、建物を取り囲む方形の区画溝SD238・240・242が新たに設けられる。掘立柱建物は、方形区画溝に囲まれるSB146と、これと棟方向が等しいSB125の2棟がある。

Ⅲ－B期　底部内面の暗文が簡略化される山田編年のⅡ段階3・4型式に併行すると考えられる。この時期の遺構は、SD224の東隣にSD225が設けられるほか、調査区中央にも区画溝SD223が掘削される。掘立柱建物は、Ⅱ段階3型式の瓦器椀が出土したSB123と、これに主軸方向がほぼ等しいSB

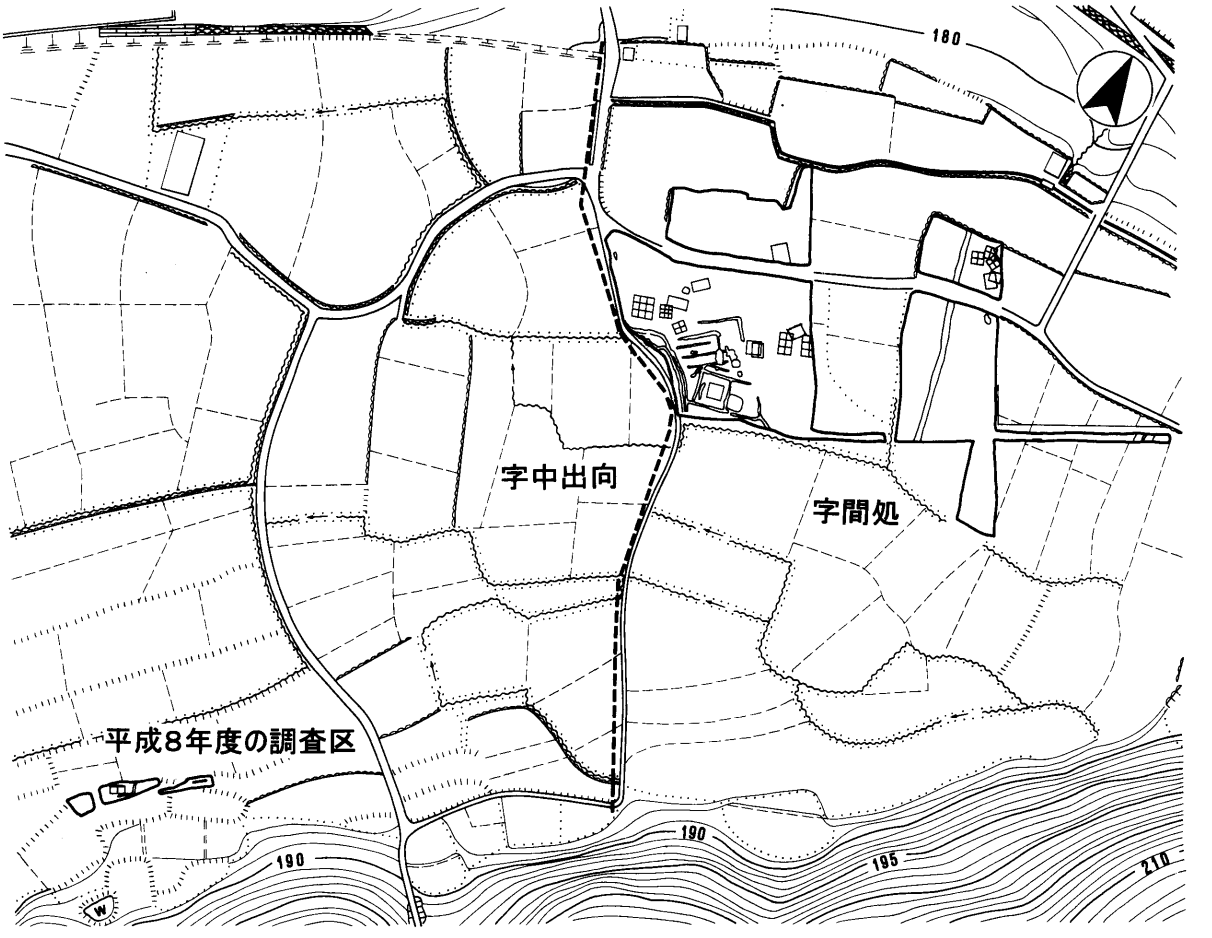


第9図　製塩土器実測図

122・136・139・138・140がある。SB122・123とSB136・139、SB138・140が3つの建物小群を形成している。SD223以東ではSB86・88があるが、この付近はピットの密集が高く、調査区北東に建物群が広がっている可能性がある。

Ⅳ期　底部内面の暗文がラセン状となり、外面のヘラ磨きを欠く瓦器椀で山田編年のⅢ段階1型式に併行し、時期は13世紀初頭頃と考えられるが、出土遺物がやや乏しい。この時期の溝はB地区南西のSD230～235のみで調査区を縦断する南北溝は認められない。掘立柱建物のうち、SB126・131は建物主軸がSD230の南北方向とほぼ等しい。

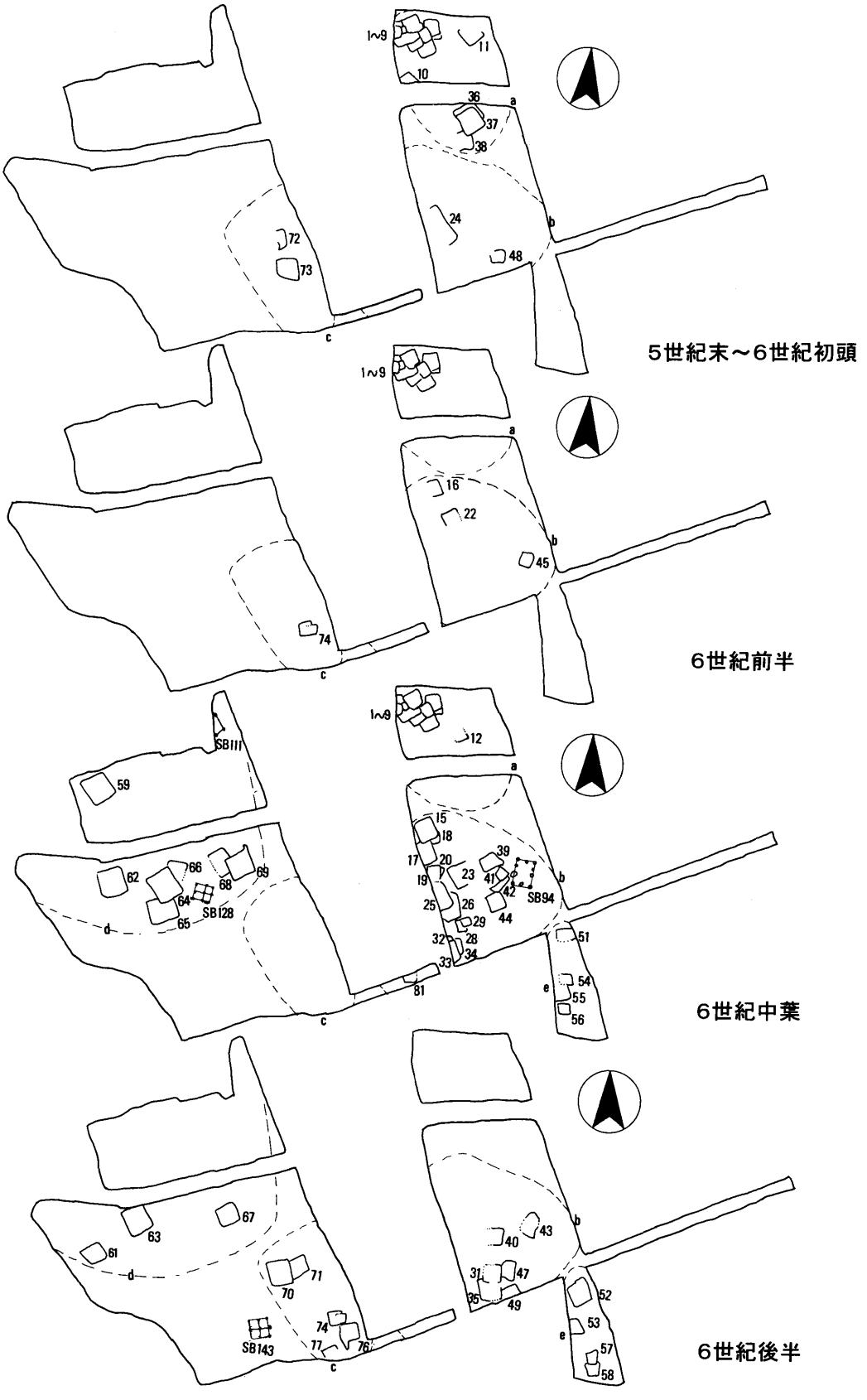
小結　検出された溝の時期は11世紀～13世紀に納まり、いずれも現在の畦畦区画とほぼ一致する。また第1次調査では、遺跡南側の丘陵裾部付近で掘立柱建物や柱列、区画溝などを検出している[17]。時期は詳細にされていないが、ロクロ土師器が出土していることから[18]、本調査区の遺構と時期的に大差はないと考えられる。従って、当時期の集落が丘陵裾部周辺にも展開していた可能性が高い。



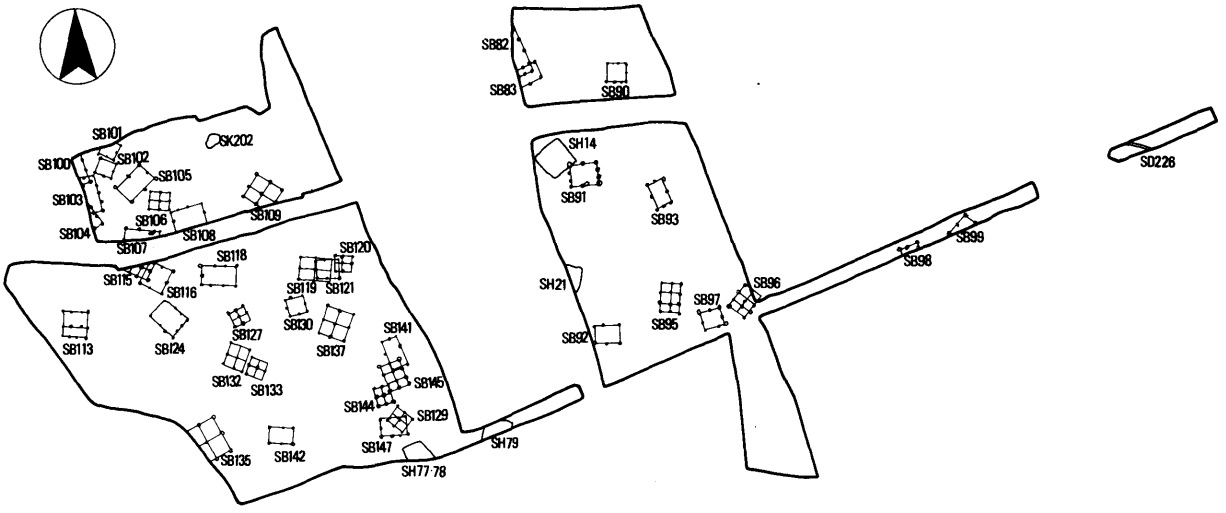
第10図　平安末～鎌倉時代の遺構と周辺地形（1：2400）点線部は字界

［ 註 ］

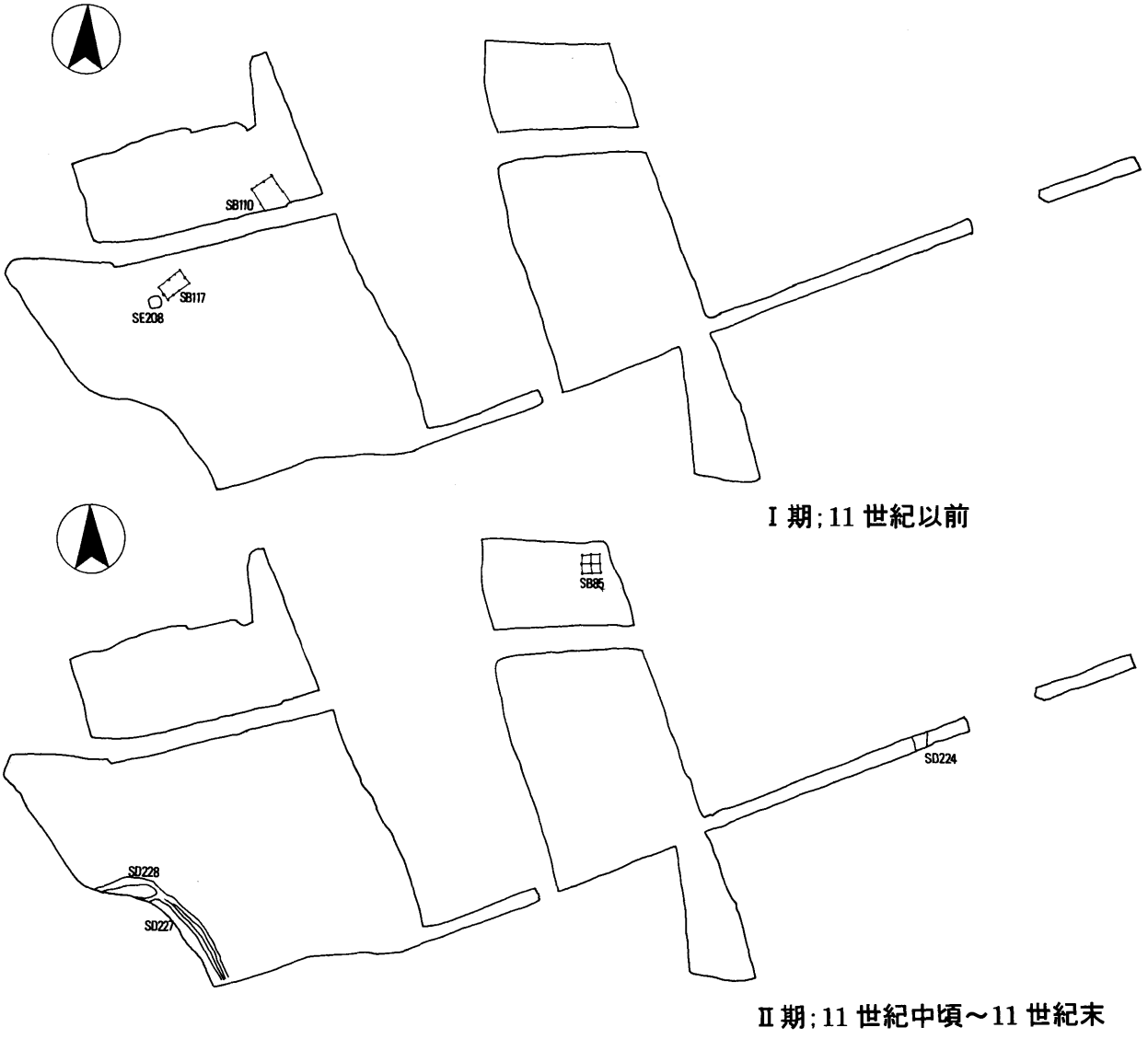
（1） 境宏ほか 「七ヶ森城遺跡・七ヶ森城古墳群
　　楳ヶ森遺跡発掘調査報告」
　　青山町教育委員会・青山町遺跡調査会、1995
（2） 境宏・筒井正明 「花代遺跡（A・B地区）・西法花寺遺跡」
　　『埋蔵文化財発掘調査概報Ⅰ』青山町教育委員会、1998
（3） 境宏 「沢代遺跡発掘調査報告」
　　青山町教育委員会・青山町遺跡調査会、1995
（4） 「平成10年度　三重県埋蔵文化財年報」
　　三重県埋蔵文化財センター、1999
（5） 前掲の文献（3）
（6） 前掲の文献（2）
（7） 田辺昭三 「須恵器大成」 角川書店、1980
（8） 山田猛 「伊賀の瓦器に関する若干の考察」
　　『中世土器の基礎研究Ⅱ』、1986
（9） 菅原正明 「畿内における土釜の製作と流通」
　　『文化財論叢』 奈良国立文化財研究所、1983
（10） 「東出遺跡現地説明会資料」青山町教育委員会、1999
（11） 福田典明 「北伊賀の群集墳概観」
　　『Mie history vol.10』三重歴史文化研究会、1999
（12） 上野市教育委員会　福田氏ご教示による
（13） 「上野市埋蔵文化財年報4」 上野市教育委員会、1998
（14） 斎宮歴史博物館　西村氏ご教示による
（15） 近藤義郎編「日本土器製塩研究」、1999
（16） 山本雅靖 「唐木谷遺跡発掘調査報告」
　　上野市教育委員会、1979
（17） 「平成8年度　三重県埋蔵文化財年報」
　　三重県埋蔵文化財センター、1997
（18） 三重県埋蔵文化財センター　筒井氏ご教示による



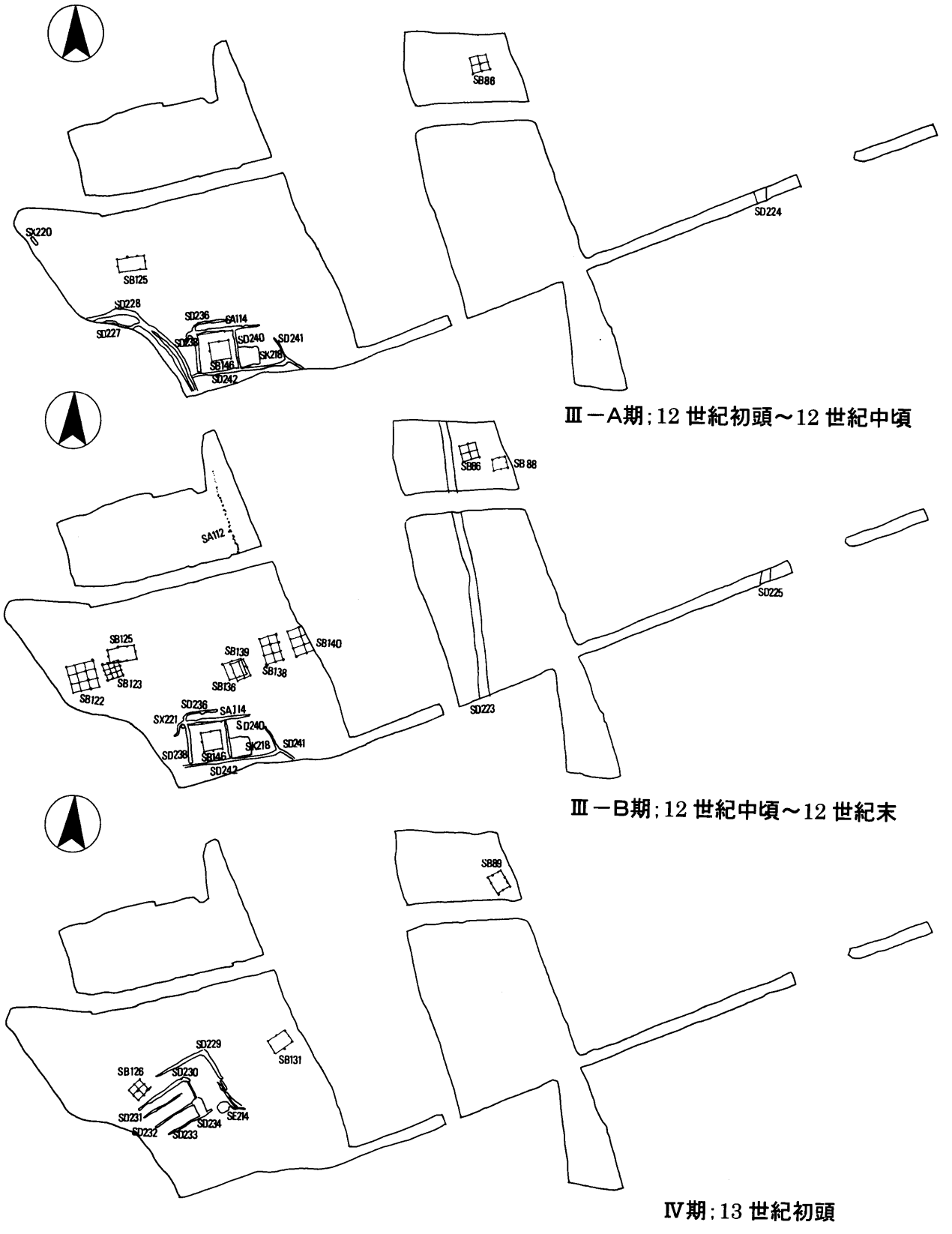
第11図　古墳時代の竪穴住居変遷図（1：1,600）　数字は竪穴住居番号に対応



第12図　飛鳥・奈良時代遺構配置図（1：1,700）



第13図　平安末～鎌倉時代の遺構変遷図（1）（1：400）



第14図　平安末～鎌倉時代の遺構変遷図（2）（1：1,400）

遺構番号	調査時	備　考
SH1	SH105	A地区
SH2	SH114	A地区
SH3	SH121	A地区
SH4	SH107	A地区
SH5	SH115	A地区
SH6	SH119	A地区
SH7	SH108	A地区
SH8	SH198	A地区
SH9	SH129	A地区
SH10	SH106	A地区
SH11	SH122	A地区
SH12	SH123	A地区
SH13	SH124	A地区
SH14	SH128	A地区
SH15	SH132	A地区
SH16	SH133	A地区
SH17	SH134	A地区
SH18	SH135	A地区
SH19	SH147	A地区
SH20	SH199	A地区
SH21	SH148	A地区
SH22	SH145	A地区
SH23	SH146	A地区
SH24	SH152	A地区
SH25	SH153	A地区
SH26	SH154	A地区
SH27	SH184	A地区
SH28	SH165	A地区
SH29	SH175	A地区
SH30	SH172	A地区
SH31	SH164	A地区
SH32	SH189	A地区
SH33	SH167	A地区
SH34	SH163	A地区
SH35	SH162	A地区
SH36	SH127	A地区
SH37	SH126	A地区
SH38	SH137	A地区
SH39	SH136	A地区
SH40	SH139	A地区
SH41	SH169	A地区
SH42	SH170	A地区
SH43	SH171	A地区
SH44	SH161	A地区
SH45	SH144	A地区
SH46	SH174	A地区
SH47	SH166	A地区
SH48	SH190	A地区
SH49	SH178	A地区
SH50	SH151	A地区
SH51	SH150	A地区
SH52	SH149	A地区
SH53	SH179	A地区
SH54	SH185	A地区
SH55	SH186	A地区
SH56	SH183	A地区
SH57	SH197	A地区
SH58	SH196	A地区
SH59	SH2	B地区
SH60	SH5	B地区
SH61	SH7	B地区
SH62	SH9	B地区
SH63	SH6	B地区
SH64	SH12	B地区
SH65	SH13	B地区
SH66	SH51	B地区
SH67	SH14	B地区
SH68	SH50	B地区
SH69	SH8	B地区
SH70	SH29	B地区
SH71	SH35	B地区
SH72	SH36	B地区
SH73	SH24	B地区
SH74	SH33	B地区
SH75	SH48	B地区
SH76	SH32	B地区
SH77	SH49	B地区
SH78	SH43	B地区
SH79	SH44	B地区
SH80	SH45	B地区
SH81	SH46	B地区
SB82	－	A地区

遺構番号	調査時	備　考
SB83	－	A地区
SB84	－	A地区
SB85	－	A地区
SB86	－	A地区
SB87	－	A地区
SB88	－	A地区
SB89	－	A地区
SB90	－	A地区
SB91	－	A地区
SB92	－	A地区
SB93	－	A地区
SB94	－	A地区
SB95	－	A地区
SB96	－	A地区
SB97	－	A地区
SB98	－	A地区
SB99	－	A地区
SB100	－	B地区
SB101	－	B地区
SB102	－	B地区
SB103	－	B地区
SB104	－	B地区
SB105	－	B地区
SB106	－	B地区
SB107	－	B地区
SB108	－	B地区
SB109	－	B地区
SB110	－	B地区
SB111	－	B地区
SA112	－	B地区
SB113	－	B地区
SA114	－	B地区
SB115	－	B地区
SB116	－	B地区
SB117	－	B地区
SB118	－	B地区
SB119	－	B地区
SB120	－	B地区
SB121	－	B地区
SB122	－	B地区
SB123	－	B地区
SB124	－	B地区
SB125	－	B地区
SB126	－	B地区
SB127	－	B地区
SB128	－	B地区
SB129	－	B地区
SB130	－	B地区
SB131	－	B地区
SB132	－	B地区
SB133	－	B地区
SB134	－	B地区
SB135	－	B地区
SB136	－	B地区
SB137	－	B地区
SB138	－	B地区
SB139	－	B地区
SB140	－	B地区
SB141	－	B地区
SB142	－	B地区
SB143	－	B地区
SB144	－	B地区
SB145	－	B地区
SB146	－	B地区
SB147	－	B地区
SK148	SK103	A地区
SK149	F-23, P2	A地区
SK150	F-24, P1	A地区
SK151	F-25, P3	A地区
SK152	SH120	A地区
SK153	H-22, P1	A地区
SK154	G-24, P5	A地区
SK155	G-23, P3	A地区
SK156	SK112	A地区
SK157	SK113	A地区
SK158	SK102	A地区
SK160	G-2, P4	A地区
SK161	G-3, P3	A地区
SK162	G-3, P6	A地区
SK163	G-3, P11	A地区
SK164	G-3, P7	A地区
SK165	G-3, P1	A地区

遺構番号	調査時	備　考
SK166	G-3, P8	A地区
SK167	G-1, P7	A地区
SK168	SK117	A地区
SK169	G-1, P4	A地区
SK170	SK116	A地区
SK171	I-11, P14	A地区
SK172	I-11, P15	A地区
SK173	SZ109	A地区
SK174	SK125	A地区
SK175	SK110	A地区
SK176	N-23, P2・8	A地区
SK177	SK138	A地区
SK178	SK187	A地区
SK179	SK168	A地区
SK180	SK131	A地区
SK181	SK191	A地区
SK182	SK192	A地区
SK183	SK193	A地区
SK184	SK194	A地区
SK185	SK130	A地区
SK186	P-25, P8	A地区
SK187	SK158	A地区
SK188	S-2, P4	A地区
SK189	SK176	A地区
SK190	SK177	A地区
SK191	T-1, P5	A地区
SK192	SK180	A地区
SK193	SK195	A地区
SK194	SK181	A地区
SK195	SK159	A地区
SK196	SK160	A地区
SK197	SK157	A地区
SK198	SK156	A地区
SK199	SK155	A地区
SK200	SK200	A地区
SK201	SK141	A地区
SK202	SK4	B地区
SK203	SK3	B地区
SK204	G-5, P17	B地区
SK205	H-11, P5	B地区
SK206	H-12. P2	B地区
SK207	SK11	B地区
SK208	SK54	B地区
SK209	J-9, P1	B地区
SK210	L-11, P1	B地区
SK211	SK18	B地区
SK212	SK22	B地区
SK213	O・P－P5・6	B地区
SE214	SE23	B地区
SK215	SK30	B地区
SK216	Q-7, P1	B地区
SK217	SK39	B地区
SK218	SK37	B地区
SK219	SK47	B地区
SX220	SK1	B地区
SX221	SK34	B地区
SD222	SD104	A地区
SD223	SD101	A地区
SD224	SD143	A地区
SD225	SD142	A地区
SD226	SD140	A地区
SD227	SD15	B地区
SD228	SD10	B地区
SD229	SD16	B地区
SD230	SD19	B地区
SD231	SD21	B地区
SD232	SD17	B地区
SD233	SD28	B地区
SD234	SD25	B地区
SD235	SD20	B地区
SD236	SD26	B地区
SD237	R10・11－P5	B地区
SD238	SD27	B地区
SD239	SD38	B地区
SD240	SD31	B地区
SD241	SD40	B地区
SD242	SD41	B地区
SD243	SD53	B地区
SD244	SD201	C地区
SK245	SK202	C地区
SD246	SK203	C地区
SK247	SK204	C地区

第13表　遺構番号対照表

報告書抄録

ふりがな	なかでむかいいせき（だいにじ）はっくつちょうさほうこく　ほんぶんへん
書名	中出向遺跡（第２次）発掘調査報告　本文編
副書名	
巻次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	169
編著者名	竹内英昭・松本美先・濵辺一機
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒515－0325　三重県多気郡明和町竹川503　TEL 0596－52－1732
発行年月日	西暦2000年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積m²	調査原因
なかでむかいいせき 中出向遺跡	ながぐんあおやまちょうはねあざなかでむかいほか 名賀郡青山町羽根字中出向ほか	245011		34° 39′ 36″	136° 10′ 23″	19960508 ～ 19960118	7,670	平成９年度県営ほ場整備事業に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
中出向遺跡	集落跡	縄文時代		縄文土器・石棒・石錘	
		古墳時代	竪穴住居跡、掘立柱建物 土坑、ピット	土師器（杯・椀・甕・甑） 須恵器（蓋杯・高杯・壺） 製塩土器、紡錘車	古墳時代後期の大規模集落跡。備讃地域の製塩土器出土。
		飛鳥・奈良時代	竪穴住居、掘立柱建物 土坑、溝、ピット	土師器（杯・椀・甕・甑） 須恵器（蓋杯・高杯・鉢） 製塩土器	掘立柱建物を主体とする集落跡。「安」の刻書須恵器出土。
		平安・鎌倉時代	掘立柱建物、溝、土坑、土壙、墓、柱列、ピット	瓦器・白磁・土師器皿 土師器羽釜・鉄製品 鉄滓・獣骨	区画溝を多数検出。掘立柱建物の棟方向は溝とほぼ一致。

平成12(2000)年3月に刊行されたものをもとに
平成19(2007)年8月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告169

中出向遺跡（第2次）
発掘調査報告
－本文編－

2000年3月
編集・発行　三重県埋蔵文化財センター
印　　刷　（有）第一プリント社